てゐる總領息子です。これを愛せぬのではない。愛は平等であるが、その加はり方、働き方が違ふのです。愛は生命を救ひ終るまで、無限に働きます。迷へる者、惡人に對しては、その惡の消え終るまで、生命の眞に救はれるまで、止まることがありません。親鸞上人の言葉は、もちろん自力を排して、他力本願專修の教旨を說明したものですけれども、また愛の本意を明に示した言葉としても、借りて用ゐることができるでせう。

阿彌陀佛は救ひの力、即ち慈悲で、愛の別語と言つても差支ありません。自力で聖道に進むことのできる善人よりも、善を爲す力を持たない惡人に、形の上で先づ救ひの力が強く加はるといふのは、まことに當然なことではないでせうか。こゝに又眞の愛の精神は、通俗の「かわいがる」などゝいふことゝ全く違つてゐることが發見されるでせう。

九、「かわいがる」とは違ふ

愛は通俗の「かわいがる」とは全く違ひます。通俗のかわいがる相手になるものは、具體的外面的な人か物であり、その中の自分の好きなものであり、從つて好きなものによつて自分の感情を滿足させるといふ、不純な要素がまじつてゐます。それ故に愛の働きは、人を甘やかすとは全くちがひます。愛は好き嫌ひに關係しない、又衝動的な自我感情の滿足を思はない。たゞ人を救ひ、人を育て、人を生かし、而て總てのものを淨化して、一つに融合させる力の現はれですから、甘やかすことでは、愛の働きを成就し得ないばかりでなく、かへつて愛の精神をそこなひます。

人を救ふ道は一樣でない。人を育てる方法も千差萬別である。和合には根本の要點がある。それは人とその心身の要件とに從つて、無限に變化します。肉體の病氣をなをす方法にも、肉を割いたり、骨を削つたり、手や足を切り取つたり、非常な苦痛を與へるやうな、辛辣な外科的方法もあれば、溫泉に浸つたり、按摩をとつたり、甘い藥を飲んだりする、快い方法もあり、冷やすことの必要な場合もあれば、煖めることの必要な場合もあるやうに、人の精神人格を救ふために、或る時は雷鳴のやうな怒りの形ちで、鞭を振ふ必要もあるでせう。或る時は忍耐深い笑ひの形で、絕えず慰め續ける必要もあるでせう。

愛から出る怒りは、それを受ける人にとつては、あり難い怒りであり、傍に立つ人にとつては、快い怒りです。なに人でも同じ立場に立つた人に是認されるやうな、少くも人の氣持ちをせい〳〵させる怒りでなくては、正しい怒りではありません。個人的主我的感情のみから起る怒りは、道德上の犯罪です、不正です、惡魔です。怒りとは精神的の破壞であるから、人に向つて、人格に向つて

發せらるべきでない、唯「惡」に向つてのみ發せらるべきです。惡を退治する怒りが、惡であつてはなりません。主我的感情の怒りは、必ず人を憎む心から起ります。「惡」を憎む心と反對です。從つて人生を淨化することができません。のみならず、人生を傷けます、不幸にします。この怒りは斷じて許してはなりません。

人を育てるには、健康を要件としなくてはなりません。健康は正しい生活法、適當な生活法によつてのみ得られます。而て「正しい」といへば、すでに理想的たること、卽ち原則に從ふことを意味し、「適當」といへば、必ず理想を以ての統一、卽ち抑制のあることを示して居りますから、人を育てる愛の一面には、嚴肅な權威の働くものがなくてはなりません。もちろんその權威は機械的に外部から加はる束縛ではなく、育つ力の中から、完全に育つために、自然に生まれる自己要求の働きであるのです。この要求に聽いて、その働きを充分にするところに、却つて權威としての愛が現はれるのです。つまり理想的に育たうとする自己目的の具體化に外なりません。「人を生かす」といふのも、人格として、理想的に生かす外にないのであるから、そこに嚴肅な要件のあることは、すでにのべた通りです。

愛は「和らぎ」です。總てのものが溶け合つて、一つになる働きです。しかし「溶け合ふ」といふことは、おせじや、愛嬌や、こびへつらひやによつてはできません。却つてそれらは、溶け合ふ心を隱すことになります、心の底のふれ合ひ、魂と魂とのふれ合ひによつて、始めて溶け合ふ作用が始まります。愛の和らぎは人格の和らぎ、精神の和らぎ、卽ち分化した個體の、生命による合一でなくてはなりません。その形式や順序は、實際の場合いろ〳〵になりませうが、和合としての愛が、最も根本なところから出て、最も根本のところに働きかけ、最も根本のところで一つになるといふ要點だけは、いつでも變ることがないのです。

一一、愛は生命の泉

愛は自然にわき出る生命の泉です。自然の自然ではなく、人格の自然から、卽ち物としての自然ではなく、人格の働きとしての自然からわき出る活水です。細工によつて、强壓によつて出てくるものではありません。いろ〳〵な小細工で人をだますやうなことをしたり、虛榮心や物質慾を滿足させて、人を釣りよせたり、そんなことが愛の媒介になると考へてゐる人がありますが、そんことは何等愛と交渉のある事柄ではなく、むしろ愛と反對の方に驅け出す態度です。愛の輕蔑を買ふ外に、何の利益も得られません。

何等かの威力を示して、愛を强制的に請求する人、涙を濫用し、感傷を以て愛を誘發しようと試みる人も、また的はづれです。一方には愚しさを暴露し、一方には愛を追ひやる外に、何の獲物をも手にすることができない人です。

もし威力を用ゐようとならば、愛そのものゝ威力、愛の純眞な本質から出る威力のみが、他の愛をせり出すことができます。愛の威力の外に、愛を呼び出す力は斷じてありません。

或る意味に於て、愛は涙です。但しその涙は眼から流れる水滴ではありません。感覺で流す涙ではありません。魂が魂に流す涙です。生命を――人格を生かす涙です。むしろ物質を生命に、自然を人格にとかしこむ涙です。生命の泉です。天から降る甘露です。淺薄な感傷などとは、似ても似つかないものです。

涙は强い感情の具體的なしるしとして、喜びにも、悲みにも流されます。しかも私どもの感情は何に對しても最も强く動くべきでせうか。それは私どもの最も深い要求の目的に向つてゞなくてはなりません。その最も深い要求に關して、純粹に動く感情にのみ、眞の喜びがあり、眞の悲みがあります。この意味に於て喜びの涙も、悲みの涙も、その純眞なものは、たゞ一つに關して流されるべきです。實際に流される機會は、無數無限にあるでせう。けれどもその涙の泉の源、その注ぎ入る海は、たゞ一つでなくてはなりません。

外に向つて發露する道德的感情の本は深い意味での同情です。人格と人格とが一つに相抱く感情精神と精神とが一つに沁み合ひ、流れ合ひ、溶け合ふ感情、それは喜びにつれ、或は悲みにつれて共鳴し合ふ生命の昂揚であつて、苟も精神を以て相ふれる時、自然に人の內部から起らずには居ないのが同情です。强いるべきものでもなく、强いられるべきものでもありません。二つの人格的の魂が一つになるといふことは、上つらの小細工によつて、出來ることではない。又そんなことで押し止めることもできることでない。小さな私我を超えた、根本の精神の働きであるから、その根本に關係のない、私我的な何事にも動くものではありません。もし動くといふなら、それは僞りの同情です。

一二、同情

深い意味での同情とは、愛の內面感情の部分、愛の動き始める感情の部分、或は愛の消極的の側面と見られます。人格と人格とが一つになる働きの感情的側面であり、而て人格の本質は理想としての靈的生命であるから、同情の根柢には、崇敬、渴仰、憧憬の感情が動いてゐるはずです。この感

情に裏付けられない同情は、眞の同情ではありません。形の上での同情は、比較的に充ち足りてゐる心が充ち足らぬ心に向つて發動してゆく形になつてゐます。而してこの形がその方向に更に強められると、煩悶、苦惱、窮乏、危險などの狹い特殊な狀態にあるものに對して、慰安、救護などをさせるやうにする、その心持ちだけになります。さうして遂に人格の値うちを認めての、眞の同情の意義が忘れられ、階級的の「憐れみ」となり、「施し」となつて、却つて人格を汚すやうな關係になることがあります。

苦んでゐるものに對して憐れみの情を起すといふことは、人情の初歩、貴い愛の種子ではありますけれども、それが醇化されて、眞の同情にまで徹底しないと、人間としての生活を潤す力とはならないで、却つて人の精神を浪費するだけの徒勞に終ることになります。同情は人間の相互的生活の天地ともいふべきもので、これなしに二人以上の集團生活は、少くも道德的に出來ないと言つてもいゝものであるだけ、その貴い意味をよく考へて、みだりに安賣をしてはなりません。

同情が物質を媒介とし、個人に對して現はれた行爲が救助ですが、その殊に著しい場合は乞食者への施しでせう。具體的の實行にまでならなければ、同情は徹底しませんけれども、「物」を用ゐるときには、その意味が忘れられて、たゞ物の授受そのことに値うちがあるやうに考へられ易い弊があります。極端になると、犬に食物をやるやうな、また犬が食物を貰ふやうな精神になり、態度になつて、全く人間の品位を忘れてしまい、與へるものは私我的の優越權の滿足、受けるものは生物的の慾望の滿足を得るに止まることになつて、人間性を腐らせます。

同樣な同情の現れが社會的になつたものは、いはゆる慈善と呼ばれるのですが、この慈善も、以前は單純な「物質の施し」であつたその弊害にだん〳〵氣がつき、ただ物を給與するよりも、働くことのできるものには、できるだけ仕事をする道を開いてやつて、獨立の人間の資格を保たせるやうにすると共に、自立の不可能なものを補助するのも、社會の共同的責任としてすることになつて居ります。從つて名目も慈善事業でなく、社會事業と呼ぶやうになりました。つまり上の階級に立つものが、下の階級に居るものに惠むのでなく、平等の社會生活をしてゐる仲間お互ひが助け合ふといふ旨意になつたので、これは道德思想の大きな進歩といはなくてはなりません、但しこれは終局ではない、その精神に於て更に一歩を進めることを要します。

一三、「まこと」の數理

一體同胞たる平等の人間の間に、從來の意味のやうな、「惠む」といふことのあるべき筈がありま

せん。お互ひに助け合つて生きてゆく、人格を育でゝゆくことがあるだけです。むしろ助け合ふといふ形に於て、一つ人格的生命に融け合つて育つてゆくだけです。而してその一つの人格的生命といふのは、私どもの無上の要求の目的なのですから、助け合ふといふのは、個人間だけの關係で言ひ表はしたので、實は至上の神聖な値うちへの共同奉仕なのです。

他人を助けるとは、他人を通して、その中にも現はれてゐる貴きものに仕へるのです。それゆゑ社會生活の原則としての相互扶助は、即ち相互奉仕でなくてはなりません。自分の餘り物を他人に與へるのではない、自分の最も貴い物を至上者に捧げるのです。その形は一錢の金、一椀の飯であることもあるでせう。けれどもその實質内容は自分の全精神、全人格でなくてはなりません。

わが最も貴いものに仕へるのには、わが持つものゝうちの最も貴いもので仕へないのは僞りです捧げるのに、わが持つてゐる總てのものを捧げないのは僞りです。「まこと」とは、最も貴重なもの總てのものを捧げることによつて示される心の姿でなくて、何でせう。

「富者の萬燈より貧者の一燈」といふことわざがあります。貴かるべき萬個の燈明よりも、一つの燈明の方がなぜ貴いか。神佛を離れた人間だけの値ぶみでは、一つよりも萬の方が貴いに相違ありません。一圓貰ふか、萬圓貰ふかと擇ばせるなら、まづ大抵萬圓の方を取るでせう。神佛への奉納の時には、どうしてその値うちが顚倒されるのでせうか。

いふまでもなく「まこと」或は眞心の「多少」といふよりも「有無」です。本質の上からいふと、眞心の多少といふことはありません。純でなければ眞心とはいへないのに、「多」といへば既に不純を殘して居ることを示して居ります。僞りのあることを示して居ります。「僞りを含むまこと」といふものはないのです。

十萬圓持つてゐるものが一萬圓寄附しても、あとにはまだ九萬圓殘つて居ります。一圓きり持たないものが一圓寄附すれば、殘るところはありません。つまり零です。物質だけの經濟上の値うちは、一萬圓が一圓の一萬倍です。けれども精神の値うちからすると、十萬圓持つ者の一萬圓は十分の一、一圓きり持たない者の一圓は一分の一、即ち一で、そこに十分の九の差があることになります。更に殘高との比例でいふと、十分の一に對する無限大といふ比較になります。持つてゐる者の少部分だけを割いて出すのと、その全部を出す者と、その何れが純か、そのいづれに「まこと」があるか、なぜ富者の萬燈より貧者の一燈の方が貴いか、きわめて明かでせう。

一四、親子と夫婦

一切の人格交渉は智的にも、意的にも、情的にも、最上の値うち、絶對の理想に發出して、またそれを目指す働きでなくてはなりません。言葉を換へれば、常に最も高貴な生命によつて裏づけられてゐなくてはなりません。親子の關係も、夫婦の關係も、兄弟の關係も、主從の關係も、友人の關係も、團體的關係も、それが人間の資格、即ち人格に於てゞあるかぎり、至上絶對の要求の充足として成りたゝねばなりません。さもなければ、それは假りのもの、僞りのもの、私我のもの、偶然なもの、機械的な宿命の遊戯になつてしまひます。

親子の關係が若しこの理想に立脚しなければ、親は子を以て自己の所有物と考へ、自分一個の慾望次第に、どんなにでも左右できるものときめてしきひます。また子は親を以て自分が育つ方便のやうに考へ、どんな慾求でも滿足させてくれる筈のものときめてしまひます。斯うなると、親子の交渉はたゞ人格を害し合ふ外に、何の益もないものにならなくてはなりません。親は高貴な生命を代表して子に臨み、肉的私我の子ではなく、高貴な生命の新發展として產み育て、又子は高貴な生命の代表として親を仰ぎ、肉的個身の親を通して、高貴な生命の親に仕へ、かくて親と子と、互ひに貴きものへの奉仕として相交渉するとき、そこに初めて眞の慈、眞の孝が、眞の愛、即ち至上の生命の働きとし現はれてまゐります。親子關係はもはや偶然な生物的宿命でなく、必然にして而も永遠な理想の實現であつて、肉的關係はたゞその過程の最初の段階、又その具體化の材料たるにすぎないことゝなるわけです。

夫婦關係も理窟は同じことです。たゞ形の上では、親子は新舊先後の關係、大小强弱の關係で、一つの個體生命が二つに分化してゆくのに對して、夫婦では同時的で、對等で、二つの個體生命が一つに綜合される關係に立つ點に於て異つてゐます。而して發動の順序方向は違ひますけれども、肉體的、生物的、自然的要件を關係の基礎とすることに於て、どちらも共通です。それ故にまた現實の愛情は親子、殊に母子の間に最も早く現はれ、夫婦關係に於て、最後の完成に高められるといふ差別はあるけれども、いづれも共に、最も具體的な愛の働きが見られ、最も强固な交渉が成りたちます。それだけに具體的な關係に縛られて、精神的交渉の自由が、知らぬ間に狹められてゐるといふ弊を生じ易く、自然生活以上の人格的、文化的生活を發展させないで終る場合が多くなりがちです。この點は親子夫婦の關係に於て、他の人間關係よりも、一層反省と努力とが、眞愛の發現のために要求されるところなのです。言ひかへると、親子夫婦間に於ける自然感情は、最も安易で、しかも强烈なだけ、愛即ち自由の働きであるところの、人の精神的發展を抑制する力も、また從つて大きいことを知つてゐなくてはなりません。

支那の古い教へに、「父子親あり」「夫婦別あり」といふことがありますが、これは親子の間、及び夫婦の間に於ける人格的愛の實現の原則、或はその愛を全くする要件を揭げたものに相違ないのであるから、「親あるべし」「別あるべし」の意味と解すべきでせう。さうすると、親子は個體の分化に出發するがために、人格關係の分離にまで走り易く、夫婦は肉體的結合に基礎を置くがために、自然感情の滿足で終り易い。そこで親子間に於ては、親愛和合の精神を、生長すると共に深めてゆく努力が必要であり、夫婦間に於ては、反省と批判との態度を忘れないやう、まづ始めに要求しなくてはならない。この方針に依つて、孰れも眞愛の發動實現を、誤りなくすることができるといふのであらうと思はれます。

一五、人格關係の基礎と友情

人格の意義からすると、總ての人は友人關係を以て、共通の基礎とするものと言はなくてはなりません。友人關係とは平等にして且つ獨立の人格關係です。親子も夫婦も、精神的にはもちろんさうであるべきです。人はすべて意義に於て平等な人格者であるべき筈である以上、それ〴〵皆獨立の立場を以て交渉して、精神的融合に進むべきであるから、この點に於て、如何なる人も、最深義の友人關係から、種々の特殊關係に分化してゆくのであると解されます。つまり友人關係は、自然的には究極であるが、文化的には出發點なのです。

もし親子の形式でいふならば、なに人も唯一の生命、即ち根本人格內容から發出してゐるのであるから、この生命に對して親子なのであり、從つて總ての人は、悉く一つの親の腹から出た兄弟姉妹です。この根據を外にして、四海同胞といふ言葉の出處はありません。現實の兄弟姉妹は、たゞ肉體的發生の先後といふ、一つの特殊の場合にすぎないのであるから、肉體以外の條件によるときには、兄が弟に、弟が兄になることもあるべきです。科學的にその發達の程度を見れば、たとひ戸籍上同年齡の人でも、生理年齡、心理年齡の上に差等のあることは、誰でも知つてゐることでせう人格年齡の差等は更に大きいものがあらうと思はれます。たとひ自分より年少の人であつても、人格の發達に於て先輩である以上、その人の精神には、尊敬を盡して兄事しなくてはなりません。自然的の親とか兄とか先輩とかいふ地位に拘はる必要はないのです。これは私どもが追求して止まない値うち、即ち人格或は理想に事へるのであつて、つまり要求實現の當然的過程であるからなのです。

とにかく、人と人との精神的關係の最も共通的なものは友人關係であるから、その關係の內容力

となるところの友情、或は友愛は、對人道德の根本であるとしなくてはなりません。人の交りの機緣にはいろ〳〵ありますが、一貫して必要な交りの要件は、必ず道德の根底を持たなければならないことであつて、而してその道德は人格的の眞愛、即ち最善の理想、値うちを追求する熱情に發するものでなくてはなりません。言ひかへると、友人は至上なるものを共通目標とする生活の共鳴者、共働者、即ち同じ人の道を踐みゆく「お同行」、且つまた本來一つ生命を分けもつて、それによつて精神に於て一體たるものでなくてはなりません。この最高の道義的媒介を持たない友は、眞の友といふことができないのです。

實行上では、慰め合ふ、教へ合ふ、助け合ふといふ具體的の關係を持つのであるが、それは部分皮相の感情や、知識や、物質だけに終局してはなりません。人格の意味に徹しない、表面的の交渉は、たとひその努力、その材料が大量であつても、眞の友愛であることができないのです。ぜひともお互ひの精神に、高貴な背景があり、表面の言葉や物質は、その高貴な値うちのしるしとなり、至上の理想の實現となるものであることを要します。從つて又お互ひの個人に就いていへば、一つの生命の發展の形として、共に精神的に醇化し合ひ、生長し合ふ結果を生ずることを要します。つまり友愛は奉仕の最も具體的な、純な形なのです。

消極的にいへば、他人のどんなところに値うちを置いて親交するかは、直ちにその人自身の人格內容の說明になるのですが、とにかく精神的に自己より優れた人を見出して、仰いでこれに師事しないで、むしろ自身より劣位にあるものを喜んで、これに親狎するといふ頽廢的傾向は、最も輕蔑しなくてはなりません。更に進んでいへば、總ての人の中に貴むべきものを發見し、從つて總ての人を友とすることのできるやうにならなくてはなりません。

一六、結婚生活と貞操の德

普通の兄弟姉妹は肉緣關係の上に立つために、この特殊な具體的な要件によつて、友愛は一層强められるわけです。學ばず、努力せずに、自然關係によつてその愛が誘導されるのであるから、眞の友愛、或は人格關係に進む入門であると言つてよろしいでせう。

けれども兄弟姉妹の肉緣關係はまだ間接です。夫婦になると、それは直接なものになりますから友愛の特殊具體化は極點に達し、その實現が最も强大な筈です。それだけまた特殊具體の形に囚はれ、狹小な部分的な世界――官能の世界に押込められて、廣い深い、眞の友愛の實現にまで發展し得ない危險の多いことは、前にも申しました。戀愛生活、結婚生活に於て、信仰――理想の憧憬欣

求を共通に持つ、或は神の媒介といふことを、特に最も必要とする所以です。

夫婦間の道德として最も重く視られてゐるのは、貞操といふことです。貞操の精神的意義は、愛の純一恒久といふことにあるでせうが、貞操がなぜさやうに重く視られてゐるか。「種」の存續の形によつて、自己の發展を具體化永久化しようとする、生命慾そのものから起るといふ說明もありますが、これだけでは道德としての意義が不十分です。わが國に於て、家系の純一を保つためといふ理由から、特に婦人に對してのみ貞操の德を要求したのは、元來功利的な考へ方なのであるから、眞の道德的權威を持つことができません。生物的にはとにかく、人格的には貞操は夫婦共通の平等な道德です。一つの結婚生活を構成する男女の相互關係に於てのみ進展する愛の現はれとしての必須的道德が、その一方には必要であり、一方には必要でないといふわけのあるはずがありません。

一體道德といふものは、人格關係であつて、孤立した個々人間に於ける機械的關係でない。相手が限られた個體であるにしても、その中に、共通の、或は一般的な精神的意義を認めた後に、初めて起るものです。一般的な精神的意義とは、なに人にも要求される一般的の値うちであるところの理想に生きるといふこと、即ち人格を持つてゐるといふこと、その人格の發動の機關として、意志乃至自我があり、至善に向つて自律的生活をしてゆくことであつて、自發的に至善を追求せずに居ることのできない心持ち、無限に高きものに對する無限の思慕、即ち理性愛が道德の根本と言つてよろしいのです。從つて各自はその內面にある、人としての生命たる至善に向つて、總てを捧げつくして、純一な態度を恒久に保たなくてはなりません。この人格の統一性、愛の純一性、これが即ち貞操の德の根本なのです。

貞操はまづ自己に對する道德であるべきです。自己の裏にある理想、即ち眞の我れに對する信順の恒久純一でないもの、自己に對して不信なもの、二心あるものが、どうして他人に對して、他の人格に對して、貞操を守ることができるでせう。他に對する貞操は、ぜひともまづ對自己の貞操——永久の堅信專念を豫想しなくてはなりません。自己の人格の純一恒久を豫想しなくてはなりません。この道德的根據を內面に持たないものは、貞操の事をいふ資格のない人です。

總ての人に人格——少くともその種子——を豫想する以上、貞操の德は自己に對すると同樣、總ての人に對して守られるべきです。唯現實の個人に於ては、その人格の發達實現に程度樣式がそれぞれ異つて居り、從つてその人格の本質に於て、總ての人が具體的に契合するまでになつてゐないため、現實に貞操の德を完全に守り合ふだけの、深い關係になつてはゐませんが、少くも友愛關係を現實に結び得た人の間に於ては、そこに必然貞操の德が發生する筈です。而して夫婦は前述のや

うに、最も深い、堅い特殊の友愛關係に於て結合してゐるものであるから、そこで特に夫婦間に貞操の德が強く現はされることになるのです。

要するに夫婦間に於ける貞操の德は、性質の問題でなく、程度方式の問題なのであつて、その重大なのは、夫婦間に限られるためでなく、却つて何人の間にもあるべき、一般的な人類道德の、最も顯著な實現の場合であるがためなのです。

一七、貞操の究竟

「貞婦は兩夫にまみえず」といふ格言がありますが、このやうな言葉から、貞操といふことが、甚しく外面的に、且つ部分的に解釋されてゐる弊があるやうです。道德は實行によつてその意義が完成されますが、內面的精神的充實を持たない實行は、形だけ道德の法則にかなつてゐるやうでも、眞の意味では道德になりません。道德は實行を除外してならないと同時に、まづその精神が問はれなくてはなりません。

結婚は一男一女の兩人が相結んで精神的に一體となることが、その關係の基本です。それゆゑに結婚して夫婦になるのは、一人と一人との同居同棲、即ち單純な共同生活を始めることではなくて一體となつた綜合人格の生活が始まるのです。從つてもとの一人一人はそこで無くなつてしまつてその代りに合體の一人が誕生するのです。その意味に於て、結婚式といふものは、一人と一人とにとつては送葬式であり、新しい合體の人にとつては誕生式でなくてはなりません。この意義のない結婚式は、道德的に無意義です。

すでに從來の一人としての立場を失つた以上は、從來どほり一人だけの立場で考へたり、言つたり、行つたりすることを全然棄てゝしまふのが當然でせう。夫婦としての生活範圍に拘はる思想言動は、ぜひともその新しい共同一體の精神から發生しなくてはならないのが當然でせう。貞操とは卽ちこの共同一體の精神的人格を、必ず常に心に執り持つて離さない、一切の言動をそれによつて裏づけるといふことにあるのです。別々なお互ひが背き合はないといふことではないのです。

この共同一體の精神的人格は、兩人を超越して、しかも兩人を抱擁してゐるものであるから、要するに人格の本源たる理想であり、眞實であり、精神であり、生命であり、それが結婚、或は夫婦生活といふ特殊の關係に現はれたものでなくてはなりません。但し合體の一精神と言つても、具體的には別に存在し得ないものであるから、夫婦の各自が分け持つて、めい〳〵の心を全くいれ代へその新しい心で生きるほかにないのです。

この夫婦關係に於て現はれ、夫婦生活に於て具體化せらるべき理想を外にして、めい〳〵自分勝手な考へを持つたり、勝手なことを言つたり、勝手な行ひをしたりするのが、不貞、卽ち貞操を守らない生活です。

自分一人の滿足のために、夫婦が互ひに相手に求め、相手を責めるやうなことは、いふまでもなく積極的の不貞です。自分一人の滿足のために、夫婦關係をさし置いて、勝手に他の人に求めすがることは、更に夫婦關係の破壞です。從來通俗の貞操の解釋は、この破壞生活の中心的な部分に關してゐるのであるから、本來正しいことではあるが、精神を忘れて外形だけを見ることによつて、その意義を失つてゐました。

人間としての結婚生活は、その關係の中に精神人格を抱き合ひ、暖め合ひ、育て合ふことを基本的の仕事とする生活、卽ち愛の生活であるから、一切の事は常にこの一事を中心とし、目的として、統一されてゐなくてはなりません。この目的を無みし、この統一を破る思想言動は決して許されません。この意義なくして、禮義を正したり、飲食衣服に氣をつけたりしたところで、それはたゞ空虛な形式、眞の愛のない飾りです。

子どもはこの合體の精神人格が、肉によつて具體化されたものであるから、夫婦生活の結晶といふべきものであり、夫婦にとつて子どもの貴い理由がそこにあるのですが、しかし肉の子どもが生れて始めて子どもがあると思ふのは、道德的に不徹底、無理解と言はなくてはなりません。前の意味からすれば、子どもはすでに結婚と同時に生まれたのであつて、夫婦生活は全くこの內面の子どもによつて結ばれてゐるのです。「子どもは夫婦のかすがい」と言はれる眞の意味はこゝにありますこの內面の子どもを共同に持つた自覺がなくては、夫婦生活は無意味であり、又肉體の子どもの道德的意義もわかりません。ですからまた貞操の德は、夫婦相互に對してゞなく、この子どもに對して守られるべきものと言つてもいゝわけです。

結婚と貞操とが人間生活の一つの基本たる道德的意義は、この見解を深めることによつて充實されると思はれます。

一八、家庭とその本質的な爭ひ

家庭は直接の肉緣で結び合はされた、最小團の生活體であるから、その關係が具體的であり、又人が作るといふよりも、自然に生まれ出た感があり、從つて自然感情が他の智的工夫や意的努力を裏に包んで、最も濃厚でありますから、その結合組織は最も容易で、しかも最も强固なところがあ

ります。この點が他の種々の社會生活團と違ふところで、同時に社會生活のあらゆる要素を含んでそれが圓く柔かにとかし合はされてゐます。家庭が國家社會の基礎として、道德上大へん重く視られるのもそのためです。

家庭生活の長所も、短所も、前述の自然關係で出來てゐる社會であることに由來します。最も情的の潤ひに充ちた共同生活によつて、半ば無意識の間に相互奉仕のできてゆくのが、他に得がたい長所であるのですが、また夫婦親子關係と同樣の、强い自然感情に囚はれて、生活の理想的醇化に進み得ない、自然社會のまゝに低徊して、文化社會に進み得ないといふ、大きな危險もまたそこに伏在して居ります。殊にその上に傳統や習慣の力が加はる場合には、それだけ前述の家庭生活の長所を一層安易堅固にする一面、向上精進の意氣に對する束縛も、またそれだけ强大になるわけですから、その長處を伸ばし、缺點を除くための、智的工夫と意的努力とが、裏面に於て常に活動しなくてはなりません。この工夫と努力との如何によつて、家庭が人間性にとつて非常に有力な機關となることもできれば、また大へん有害な牢獄となることもあります。

現實の家庭生活をよく觀察して見るなら、右の善惡いづれかの場合の例證を發見するに難くないでせう。私どもが最大の要求とするところから見れば、普通にいふ圓滿な家庭、幸福な家庭、樂しい家庭が、必ずしも値うちの高い家庭でなく、見かけの不滿な家庭、不幸な家庭、苦しい家庭が人道の上から、必ずしも低劣な家庭ではありません。

人間性と動物性、理想と現實、文化と自然との爭ひが、一個人の內部に常に存在すると同じことに、一家庭の中にも常にあるはずです。私ども不完全な人間が一しよになつてゐる家庭で、十分な精神的統一の容易にできるものでない以上、家庭を高貴なものに醇化するための努力が、常に大きくなくてはならないでせう。而てこの努力の大きければ大きいほど、これにす對る自然的要素、習慣的要素の抵抗も强大であるわけですから、從つてそこに烈しい戰ひも起らなくてはなりますまい。

その上、現實の世界は私どもの高貴な願ひを充たすやうになつてゐないのみならず、物質的生活資料の配當すら不十分な世界です。この間にある家庭といふものゝ對社會的關係から言つても、精神的に、物質的に安泰で幸福であることは、先づ多くあり得ないといつていゝでせう。それゆゑに見かけの幸不幸といふことは、現實に於てあまり問題になりません。ただ問題は、どんな性質の不和があるか、その不幸は何から來てゐるか、苦しみに對する家族の態度精神如何といふことでせう

一九、家庭と社會

或る人々は家庭生活と社會生活との間に、はつきりした區別をつけて、できるだけ社會的二重生活をしようとしてゐるかのやうに見えて居ります。それは精神的方面で、社會が不安不快苦痛罪惡に充ちた修羅道であるに對して、家庭は安穩幸福快樂善功に充ちた、休息處、慰安處、避難處、天國極樂である、少くもさうあるべきだといふ類の見方で、外形的方面では、社會が、十分謹慎して、言語動作を上品にし、見ゑを作り、非難をうけないやうに骨を折らなければならないところであるに對して、家庭では、どんなわがまゝをしても、無作法にふるまつてもよろしい、野放しの生活の許されるところに、家庭のあり難みがあるといふ類の見です。

現實に於て、この見方には尤もなところがあります。家庭は關係の密な、まどまりのいゝ、情味の濃い、そして對人關係に工夫や努力の比較的にいらない特殊社會であるから、一般の廣い社會よりも安易な感じがするところに相違ありません。ただでさへ寢食を共にするといふことは、共同生活の最も具體的な形であるのに、その上まどまり易い少數の肉緣關係の上に成立つてゐるのであるから、社會的共同生活の感情的滿足を、最も多く家庭に於て經驗されるわけでせう。

共通の感情、思想、意志、又地位財產等の上に生活の基礎を置く互助的生活、而も之がために特に努力を要しないやうな自然關係で成立つといふことは、家庭生活を特に安易な、自由なものにしてゐる本質的要件と思はれますが、しかしこれは家庭にのみ存在する獨特の要件ではありません。ただ家庭は少數の肉緣關係といふ要件で、その容易な成立充實を助けてゐるだけです。或は一般社會には、しかあるべき共通の理想の一面が、まだよく實現されないでゐるのに、家庭に於ては、自然的要件に助けられて、早く實現されてゐるものと見るべきでせう。理論的に考へても、家庭がやはり相互的共同的の社會生活の一種である以上、少數者の肉緣關係といふ要件以外に、本質的に違つたものである筈がなく、社會生活一般の原則精神利害得失は、家庭にも當然なければなりません、この事は家庭と一般社會とを仔細に觀察比較して見るなら、容易にうなづけることゝ思はれます。

さうであるとすると、一般社會と家庭とを本質的に別なものとする理由はないのであつて、ただ生活理想の發達實現の程度樣式を、多少異にしてゐるだけであると見なくてはなりません。又さもなくては、家庭が社會の基礎であるとする理由は立たないのです。又その結果の上から見ても、家庭と社會とに、天國と地獄とのやうな差別をつけることは、人間の全體的生活に有利でないでせう

二〇、家庭の任務

自然的情味に包まれた、暖かな沾ひは、家庭を他の團體生活から區別させる非常な強みであるがしかしそれがために、理想的精神的實現向上を忘れさせる危險もまた大きいことは前に申しました人間的向上の氣風がなく、ただその自然的情味の滿足だけであるとき、家庭はその性質に於て、豚小屋となるのであつて、いかにその滿足幸福の自感が家族にあるにしても、一味の精神的清風が常にその上に通つてゐないでは、人間の家庭とすることができません。この一事は、家庭の精神の重大な積極的要求であるのです。

濃厚な情味の暖かな沾ひは、實に一切生命の生長する最重要の田地、或は要素なのであつて、この一要素の缺けてゐるところでは、いかに高尚深遠な理想でも、精神でも、石の上に蒔かれた種子と同じく、決して發育することができません。もし或る家の入口に立つて、何となく冷たい寒い感じの身に沁むやうなことがあるなら、そこは人格的生命の成長しないところと判斷して差支へがないでせう。それは學校でもどこでも同じことです。舌や筆での說明はいかやうにもできます。けれども清淨な心の鏡に映る、直覺的具體的の感じに於ては、僞り飾ることができません。で、家庭に於ける濃厚な情味の漂ひは、まづ人格的生命を育てる田地肥料が十分に具つてゐることを示すものです。

たゞ田地肥料はどこまでも田地肥料です。それだけではしかたがありません。ぜひともそこに人格の種子をまきつけて、理性的の愛――眞の愛にまで發芽させ、人間といふものを養育する働きをさせなくてはならない。その場處として家庭は絕好のものであるのです。つまり現狀に於ては人間の苗床として、家庭はぜひ必要なもので、これに代るべき社會生活を一般的に見出すことができません。この點に於て、家庭は人間に對して、又その基礎の上に立つてゐる一般社會に對して、重大な責任を負うてゐます。わがまゝのしどころとか、安息處とかいふやうな、低級な關で止まつてゐてはならないのです。

社會が果して危險な荒海ならば、而して人間は安息の場所を要するならば、私どもは社會を改造して、人間の安らかに、樂しく住むべき場所としなくてはならない筈です。然るにその社會を現在作つてゐる人は、皆家庭に育ち、家庭を持つて、家庭から派出されてゐるものである以上、社會のわるいのも、家庭に責任があるとしなくてはならないでせう。社會は辛いところ、家庭は樂しいところと言つてすましてゐるのは、無責任の甚しいものです。この點から言つても、社會の改造のた

めに、家庭は善い社會を作る人間の苗床、人格の哺育場、精神理想の發酵地たる本來の使命を、徹底的に果すべき義務を負うてゐるものです。

家庭の對社會的任務と値うちは、實に重大です。自然から附與されてゐる豊かな要素と能力とを「寶の持腐れ」としないやうに、それを人間と社會との精神的養分として、値うちを現實に發揮するやうに、家庭の自然的要素を人間化するやうに、一面には社會的理性を家庭にとり入れ、一面には家庭的情味を社會に彌漫させるやうに、家庭生活の精神と方法とに對する努力が、十分に用ゐられなくてはなりません。

二、社會生活と不斷の改造

理論の上からはもちろん、現在の人だちの實際的要求からしても、社會といふものは、現在のやうに利害打算の取りくみ、人間同志の嚙み合ひの場處であつてはこまります。平穩無事な場合には社交や儀禮の道具を並べ、義理や人情を飾りにしてゐるが、實際生活上の慾求に觸れてくると、忽ちに修羅道の醜態を現はすのは、決して人間の活動世界の本質でない筈です。

もちろん現在の社會とても、非人間的な生活ばかりではない。善い、美しい文化的現象は澤山に見られます。歴史上にもそれはありました。さうしてまた人間的精神が發達して來てゐることも事實です。けれども立派なことゝして世間に讃嘆渇仰されてゐるやうなことは、實は大てい文化社會として、人格的生活の樣式として當然なことであるのに、それが特にもてはやされるのは、一般の人の要求がどこにあるかを示すと同時に、現實の社會生活が、どんな位置にあるかを説明するものと見なくてはなりません。

人間の要求からすると、社會が修羅場で、家庭が避難處であつてはこまります。生活が二元に分れてはこまります。全生涯、全生活を一貫して、人間の滿足の得られるやうに、家庭も社會も組織運用されなくてはこまります。してみると、どうしても社會も家庭も、ともに人間性の發露乃至は滿足としての、共通の原理の上に立たなければならないといふことになるでせう。更に言ふと、社會は家庭の延長としての一大家庭であり、また家庭は社會の縮圖としての一小社會であり、いづれも違つた要件を持ちながら、同一原則によつて、人間の要求を滿足させるものであり、共通的に、又補充的に、人間性或は人格を完成させるものでなくてはならないことになりませう。而て現在の社會に、この目的に適するやうになつてゐないところが澤山あるとすると、その社會の組織員たる私どもは、どうしても改善の努力をしなくてはならないことになります。

更に又根本的に考へますと、人間の要求には行止まりがありません。從つて理想の實現は無限軌道の過程です。ですからよし社會が現在に於て滿足完全なものであるやうでも、私どもが進むに從ひ、どこかに不滿足不完全なところが見えて來て、私どもの要求理想には合はないものとなり、そこに必然改善せねばならないといふ意見を生み出すことになるでせう。それゆゑに理想に生きるものにとつて、即ち人間として生きようとするものにとつて、常に社會改造の方針を以つて生活してゆくといふことは、いつでも、なに人にも、とりのけなしの運命であると言はなくてはなりません

いづれの場合にしても、人間として自分の生活に眞摯忠實である限りは、その家庭に對すると同じく、改造醇化の態度を以つて、社會を一層文化的ならしめる努力を生活の內容としなくてはならない點に於て、一つ道筋を進むわけです。

二二、社會改造の道德的原則

社會改造を結果する生活は、如何なる方針目標によつて指導されなくてはならないでせうか。それを形式的にいへば、社會の成立原理、或は社會生活の理想を、完全に發展させることであるといふ一言につゞめられるでせう。

社會は何ひとかの手細工で、勝手に造り出された機械ではありません。人間それ自身の要求、といふよりも、生命そのものゝ人間的發現の一樣式として生み出された、一全體の生き物です。各個人を外にして、別に社會といふ一箇體を見ることはできませんが、しかし現實に存在するもので、總ての個人をその中に包含してゐる活動態です。してみると、社會の原則といふものも、總ての個人に含まれながら、又總ての個人を超越して活動する、自律的の生命であつて、從つてそれ自身の要求を持ち、理想を持つて進步發展するものでなければなりません。即ち社會はそれ自身の要求理想原理に生きる獨立の生活體であるはずで、ただ社會の要求理想原理は、本質に於て、個人のそれと共通なものであるのです。

それゆゑ社會生活の原理と言つても、各個人がその止み難き根本要求の、最も純眞な本質を發揮してゆけばいゝわけですが、たゞ社會は平等の對人關係——個人の立場でいへば——の上に進展するのですから、對人關係に於ける理想の發揮、即ち「友愛」を原則として、總ての交涉が行はれゝばいゝわけでせう。

友愛の具體化は、各個人が至上善への醇化、又は至上善が我れへの實現を意味する相互奉仕であるから、從つて社會生活の實務は、個人間に於ても、社會と個人との間に於ても、すべて相互奉仕

でなくてはなりません。反對の方からいへば、苟も社會生活に於ては、友愛の精神に發しないもの相互奉仕の態度に依らないものは、いかに壯大な仕事でも、社會生活の本旨に反し、從つて社會生活を不幸にするがゆゑに、すべて排斥しなくてはなりません。

この方針をとることによつて、個人と家庭と社會とは、一貫した共通の生活となり、個人と家庭と社會とは、同一精神に統一され、而て社會生活が眞に人類を生かし、人格を育てる要件となることができるわけです。教化に於ても、政治に於ても、産業に於ても、相互奉仕の精神のあるかないか、多か少かによつて、その仕事の眞僞善惡の判斷が下されます。而て相互奉仕に反するやり方を出來るだけ打滅ぼして、完全な相互奉仕の實行にしてゆかなければなりません。これが社會改善の根本方針です。而もこれは改善のための臨機的方策ではない、實は社會生活の常道なのです。常道でないものが、眞の改善の方法とならないことは、一時病氣を喰ひ止める藥が、眞に健康を回復する滋養にはならず、眞に健康を增進する方法は、日常の食物を最も適當に按配するにあると同じ事なのです。

二三、社會と共同奉仕の一全體

社會的生活、或は團體的生活の一切の形式は、要するにすべて奉仕によつてのみ道德的意義を充實する組織的の生活體です。而して奉仕の目標は前にも言つたやうに、各個人に內在して、又同時に超越的であるところの至上善の生命を、各個人の上に實現し、或は各個人をそれに醇化し、かくてその至上善なる精神的生活によつて統一された、一全體を形つくるにあります。

この至上善なるものの社會に現はれた側面は、既に個人のものでなく、個人を超越したものであるから、この社會的至上善を目標として社會に盡くすことは、自己の私を捨てゝ、至上善なるものに奉仕する、大きな階梯となるわけです。而て社會を組織してゐる各人は、總てこの目標に對して同じ努力をするのですから、社會生活は即ち共同奉仕の生活の外にありません。

社會の各種機關は、いづれも皆この共同奉仕の實務をそれ〴〵に行ふために造られるべきもので凡そ人間社會が造り出す機關にして、この目的を持たないものは一つもあるべきでありません。もしあるといふなら、それは僞りの機關です。それは社會的の名を冠つて、實は非社會的なものであるのです。

又この社會を組み立てゝゐる各個人は、それ〴〵の關係によつて相互奉仕の生活をすると同時にどれかの社會機關の運用に參加して、共同奉仕の實功を擧げなくてはなりません。もしそれをしな

い人があれば、それは非社會人です、叛逆者です。

各個人を外にして、社會を組み立てる具體內容はないのであるから、各個人は皆それ〳〵社會全體の責任を負うてゐるのであり、又社會は共同の一全體であるから、一個人に關したことでも、その責任は全體の上にあるわけです。この旨意のゆきわたる程度に於て、その社會は完全に近つき、各個人が人間に近づくことは、申すまでもないのです。換言すれば、各人お互ひが責任を負ひ合ひ各人がすべて全體の責任を負ひ、而てまた全體が、どの一人の責任をも十分に負ふといふ生活の、徹底的に成り立つたとき、人の生活は社會的に完全になるのです。

私どもが人間であり、社會人であるかぎり、斯の如き社會生活の完成を、何等かの關係と、方式と、機關とによつて力めるべき、義務を負うてゐることを忘れてはなりません。

二四、職業と勞働と仕事

社會に必要な系統的の仕事により、各個人が自分の才能と努力とを用ゐて、奉仕の實功を、社會に貢獻する形式が職業であつて、その職業の動的內容となり、職業によつて具體的な產出をする各個人の働きが勞働です。普通に「仕事」といふのは、或る場合には「職業」を意味し、或る場合には「勞働」を意味するやうです。

現實に於ては、全く社會的生活をしない個人が考へられないと同じく、全く社會と交渉のない仕事を考へることができません。從つて何等かの意味での職業的性質を持たない仕事といふものは、殆どないと言つてもいゝ位です。ですから勞働の內容的意義も固より廣いもので、生活上必要な目的手段によつて引きつゞいて努力することです。

從來仕事とか、勞働とか、職業とかいふことを下賤なものとし、何もせずに、遊んで暮らすのが貴い人生の幸福である、目的であるとする考へ方は、かなりに廣く行きわたつて居りました。なぜこんなまちがひ切つた考へ方が、多くの人に是認されてゐたか、それには固より相當の原因があることなのですけれども、今日ではおひ〳〵そのまちがひであることを知つた人が、多くなりつゝあるやうです。たゞ今日でもあまり訂正されてゐない考へ方は、職業、從つて仕事、勞働を「金を取る手段」とばかり見てゐることです。

初めにも言つた通り、人格的社會の職業は決して金を取る手段ではありません。反對に、自分を社倉に捧げる方法です。も少し自然主義的立場を取つて言つても、自分の天才乃至能力を社會に發揮する、卽ち具體化する方法です。兩方をまとめて言へば、個人が社會に生きる仕方なのです。そ

れをまた言ひかへると、自己を社會的に造り出す方法ともなるでせう。

社會の側からすると、社會の活動進展といふことも、各個人の職業的勞働を種々の體系に組織し更にそれを一つに綜合してゆく過程の外にはありません。即ち各個人の職業的勞働は社會の活動進展の內容そのものであつて、社會の動的要件として缺くべからざるものであるから、各個人が職業に就いて勞働することを、社會はぜひとも要求しなくてはならないのです。

もし職業を「金を取る手段」であるとすると、それは個人が社會を生存の手段とすることになりますが、社會は自身に獨立の意味を持つてゐるもので、決して個人の道具として存在するものではありません。又社會が職業による各個人の努力、乃至その生產を買ひ取るために金を拂ふものとすると、それはやはり各個人を社會の道具とするもので、個人の意義に反することになります。いづれにしても、職業を收人の手段とのみ解釋することはまちがひです。

二五、職業と生活

職業が金を取る手段でないとすると、生活資料をどこから得るかといふ疑問が起るでせう。現在の社會だけの立場から、自然主義的の見方をすれば、それは全く當然の疑問です。けれども個人としても、社會としても、奉仕といふことを生活の原則と立てた以上は、この疑問を起す餘地がないはずになります。奉仕といへば、社會も、個人も、總て最も必要とするものを提供し合ふべきですから、生活に必要なものは、誰でも皆充たされるはずです。自然社會に於て、充たされても猶ほ他人の物を掠取すると正反對に、文化社會に於ては、充たされなければなほ更自分を捧げます。從つて總ての人を充たすだけの資料が足らない場合には、總ての人が一樣に不足でがまんすることになります。或る人だけが充たされ、或る人は充たされないなどゝいふ、不具不平等な現象の起る餘地はあるべきでありません。

個人と社會との人格關係だけでいふと、個人は金の取れる取れないに拘らず、ぜひとも職業によつて、社會に奉仕しなくてはなりません。社會は職業に關係なく、總ての社會員を平等に養はなくてはなりません。職業が社會人の生活の中軸であつて、到底怠つてはならないものであると同時に各個人は社會の實質であつて、それを外にして、社會はないのであるから、社會は自己の保存と進展との要件として、ぜひとも十分に各個人の生活を充たさなくては　ならないわけです。事實上、社會と個人とを動的に見るとき、社會人としての個人の生活は、職業人としての貢獻によつて、始めて具體化されるのであり、個人の組織體としての社會の發展は、職業人の能力によつて充實する

のであるから、この意味に於て、職業と生活とは、常に相伴はなくてはならない結果を生じます。

現在はまだ半ば自然人であり、自然社會であつて、文化人、文化社會にまで進み切らないために前述のやうな、人間らしい社會生活が不十分です。むしろ人間的要求とは正反對の方向に、多くの努力が費されて居ります。總ての人の原則としてあてはまる意義を持たない、抽象的な自己一人の「私」のために、人間關係の生活を破壞する傾向を多分に持つて居ります。社會生活に經驗される樣樣の不幸不愉快の醜惡現象は、總てこの根本から起ると見るのが、昔から今に至つて、變ることのない批判でせう。

しかし從來のやうな間違つた非人間的社會生活を誰も是認して居らず、滿足して居ないことも事實です。――中には無智なるがために、動物的個人主義、主我主義を至上原則と信ずる人もあるでせうが――もし果して不滿足であり、而も既に不合理なことが明瞭である以上は、早速それを改めることに努力すべきでせう。不合理で不滿足な生活に、貴い人格を汚してゐるのは、自他に對して不忠實不眞面目な態度と言はなければなりません。

二六、天職と職業

從來の考へ方では、天職と職業とを別々に解してゐました。むしろ天職などゝいふことは、一種宗教的の空想を詩的に表現したもので、現實に金を取る仕事の外に、一生の努力を捧げることがないやうに解してゐました。

私どもの生活を二元に分割するといふことは、既に言つたとほり、人格の要求に反するのであるから、その一方に統一するのは、形式上の一進歩です。たゞ問題はその統一原理の內容です。いかに統一するかです。しかるに「金取り仕事」を意味する職業は、文化社會に於て許すことのできない見解ですから、この意味の職業によつて、人間の社會的勞働に意義づけることは出來ません。そこでいま一度天職といふ言葉をとり出して、その意味を吟味して見る必要を生じます。

天職とは「天」より與へられたものとして自覺された、その人獨特の仕事を意味します。從つてその責任は「天」に對するものであつて、社會に對するものでないやうに考へられます。そこに職業といふことを、天職以外に分裂させた、理論的原因が一つ存在します。

「天」とは漠然たる言葉ですが、前から言つて來たことを基礎として解釋すれば、私どもの精神乃至人格の根源となつてゐるところの、至高の理想乃至生命を指すものといへませう。さうすると天職とは、各個人がその個性を通して、精神乃至人格、即ち絕對の値うちを社會に實現するために、

必然的な唯一の勞働方法として發見され、自覺された、最上の仕事でなくてはなりません。從つてその人の主觀からすると、それは自分勝手に擇んだ、偶然な便宜的の仕事でない、絶對の値うちが自身を實現するために、直接に特定の人を要求したのであつて、その人はつまり「擇ばれた」のであり、使命を荷はせられたのであり、而てその使命を果すための勞働が自分の天職であるといふ、自覺に立つことになるでせう。

このやうな仕事は、もとより「金」を相手にすべき性質のものではありませんから、こゝにも「金取り仕事」の意味の職業とは別物になる原因があることになります。しかし前にも言つたやうに、奉仕を原則として、各自の最善を捧げて職業に力める社會に於ては、私どもの生活が相互的に、又全體的に支持されるわけですから、金取り仕事としての職業を、天職の外に持つ必要がないことになります。そしてこの點に於て、私どもの活動は高い統一を得ることになります。

眞に自分の天職を發見した人に於ては――文化人たるからは、なに人も發見すべきです――これが遂行に最善を盡し、全力を注ぐべきですから、その外に、それと別箇の仕事を併行させるやうな餘裕を、身にも心にも持たないはずでせう。もし持つといふ人があるなら、その人はまだ眞の天職を發見しない人か、さもなくば自己の天職に對して忠實でない人、即ち眞面目な生活をもたない人に相違ありません。この立場から、又私どもの生活は、主觀的に統一されて來なくてはならないことになります。

かくて總ての人がおの〳〵その天職に全力を捧げて、奉仕の勞働をし、それを要素內容として社會が組織され、進展してゆくことゝなつて、そこに始めて文化社會が見られます。而てかくの如き文化社會こそ、眞に人間の住むべき、又私どもにとつて望ましい社會ではないでせうか。從つてかくあらせるやうに、めい〳〵努力すべきではないでせうか。

二七「金」と物の値うち

金を取る手段としてばかり職業を取扱ふことになつた原因はさておき、「金を取る」とは何の意味であるか、金はいかに取扱ふべきものであるかは、現實の經濟生活の要件であるから、こゝに必要と思はれる範圍だけに於て、一應考へて見ませう。

「金」はなぜ必要なのか。金貨を喰ふわけにゆかず、紙幣を着るわけにゆかず、銀貨や銅貨で家屋を建築するわけにゆかず、結局貨幣の實質そのものは、私どもに大した用のあるものでない。用の生ずるのはその實質でなくして、形式にあります。貨幣が代表してゐる値うち――それによつて、

いつでも任意に、私どもの生活資料が得られるといふ、信用にあることになります。もつと手近く言へば、必要なのは金の實質でなくて、金が持つて來てくれる生活資料なのです。

ところで、その生活資料とは何か、人間の生命を維持發展するために直接に用ゐられる、種々の物質材料であると、普通にはいふでせう。しかしこれとても、單純に材料そのものが目的とはいへません　もし假りに材料そのものが直接目的になるものとすると、ご飯を澤山たべればたべるほど肥えるはずであり、衣服を澤山着れば着るほど健康になるはずであるが、事實さうはゆかないでせう。して見ると、單に材料そのものだけで善いのではなくて、材料の用ゐ方、即ち形式の力が加はらなければならないことになります。而てその用ゐ方とは、適度の用ゐ方を意味します。「適度」といふことは、物質なくして意味をなしませんが、しかし明かに物質にはない形式です。

更に又「適度」といふことを考へて見ます。物質材料がわれ〳〵の生活の役に立つためには、その物質を生かす働き、材料の値うちを生命の力として發揮する働きがなくてはならない。その働きの現はれる形式的要件が、適度とか調和とか呼ばれる狀態なのです。適度調和は種々の要件の關係であつて、その關係が法則どほり成立つてゐること、即ち生活の目的によつて統一されてゐることを意味しますから、つまり一つの理想がそこに實現されてゐる狀態に外なりません。

さうして見ると、生活資料たる物質の貴いのは、その上に私どもの理想が實現され、目的に對しての手段たる關係を十分に具體的にし得た場合であつて、資料そのものが直ちに貴いのではないといふことが明かなわけです。「猫に小判」といふ諺は、この意味を極めて簡單に表はした言葉でせう

二八、物の値うちと抽象生活者

事實に就て觀察しても、私どもの生活は、無數の要件の關係の上に成立ち、その關係の調和統一の動きが、眼前の具體的な生活として現はれてゐるのです。ですからどんな要件でも、自然と人生との法則に從つて、この關係組織の中に入りこみ、自我の目的によつて統一されない限り、何の値うちをも現すことができません。いかに貴重な滋養品であれ、藥品であれ、ただ滋養になるものだといふ名前だけに囚はれて。自分の體質も、その時の心理的生理的狀態も、更にその外の生活諸要素、土地や氣候のことも考へずに、いきなり口の中に押しこんだところで、決してそれだけの効果を生ずるものでなく、よし生じでもそれは偶然であるから、それに信賴するわけにゆかないのみか、却つて害をなすことすらあります。これは物の値うちそのものは絶對なものでも、その具體的な實現は、ただ相對關係の上にばかり見られるものであるといふことを忘れて、關係即ち形式の上に現は

れる物の値うちが、その關係に拘りなく、個々の物そのものにあると思つてゐるやり方です。このやうな生活を名けて、抽象的の生活、或は無內容の生活と言つてもいゝでせう。

理論を取扱ふことを抽象的だ、無內容の生活だと輕蔑するやうな人も世間にはありますけれども總て研究や思索などいふ仕事の方法は、本來抽象の要素がなくては行はれないのであり、而てこれは結局一層高い具體化、一層高い統一を求める過程にすぎないのです。理論をただ獨立の理論として、その玩弄に耽つてゐるやうな抽象家もあるかも知れませんが、理論の目的は決して抽象的なものでありません。むしろ統一、乃至具體化を實現する過程であるところの實行に際して、前述のやうに、他との關係を引離して、個々の物そのものに執着するものこそ、眞の抽象家、無內容の生活者なのです。

この理由からして、ちやうど御飯の分量を多くたべるほど健康になれると考へるやうに、値うちのしるし乃至代表にすぎない金錢財產の實體を、ただひたすらにありがたいものとして、その蓄積だけのために一生を用ゐ終るやうな人、社會人類全般との關係組織を無視し、孤獨の立場を取つた一個人の慾望のために、飽くまで物質を獨占しようとするやうな人などほど、抽象生活者、無內容の形式生活者はないと言つていゝでせう。これ等の人達は、むしろ寶の山を懷に抱きながら、その寶を知らずに一生を終る、あはれむべき人です。

職業を單に金取り仕事と考へるのは、つまりこのやうな無內容の抽象生活者、社會に住みながら社會生活をしない人、社會を自己個人の方便、道具と考へてゐる人、自己の人格を社會文化によつて充實し、又社會文化の上に實現して、具體的の人生を生きることをしない人、即ち人格を持たない人に外ならないのです。

この人は物の値うちを殺す人、常に適度調和を破る人ですから、このやうな人が社會にあればあるほど、その社會は分裂し、衝突抗爭が起り、不安混亂の中に停滯衰廢し、從つてその人個人もまた滅亡しなければなりません。

二九、自然の人格化と經濟生活

私どもの生活資料はもちろん總て自然から與へられます。自然はその一切の物を、一切の人に平等に與へて居ります。與へたと言つていゝかどうかわかりませんが、とにかく自然物を吾々の生活資料にしてゐます。

自然物を生活資料とするとは、どんな手續きをとることかといへば、つまりだん〳〵に加工して

遂に生命の維持發展を結果するに外なりません。その加工の程度や樣式は無限であつて、その物により、場合によつて、皆各それ〳〵ちがひますものゝ、とにかく私どもから緣の遠い、無關係な自然物を、だん〳〵變質變形させて遂に人格の力の內容とし、かくてその物の値うちを發現させることに於ては一つです。それを更に簡單に言へば、自然の人格化といふことに綜括されます。

たとへば、もと天然に發生した稻に改良を加へて、今日のやうな美味豐產な種類とし、それに播種、手入れ、肥料等の人工を加へて、米を收穫し、搗き上げ、御飯にたき、更に口に入れて嚙みくだき、消化器內で消化作用を行つて、それを變質し、血管內に吸收して、各細胞に分配し、細胞內で更に變質して、熱を發生させ、他の材料から來る要素と協同して、私どもの生命を働かせ、精神人格の持續發展の仕事をさせることに終るやうなものです。衣に關しても、住に關しても、原則に於ては同じことです。

これはその外形からすると、外から內に物をとりこむ一方のやうに見えますが、しかしただ機械的に袋の中に物を押しこむのとはちがつて、そのとりこむ過程は即ち目的の到達、理想の實現、つまり人格の値うちを發揮するのであり、而して物に變化を與へつゝ、それを生活各要件の關係組織の中に編みこみ、人格の統一の下に置いて、その內容とし終るところに、値うちが發揮されるのですから、とりこむと同時に、それはまた一面直ちに自我を持ち出してゆくことにもなるわけです。私どもの生活の物質的側面は、この人格化の働きに外なりません。

自然を人格化する、この一とつゞきの過程の中で、比較的に外部にある、われわれの肉體の直接作用にまで來る部分を經濟生活とし、更にそれが生產と消費とに分けられて居りますが、前述の意味から見れば、生產も實は消費の一部分なのであつて、人格化の過程の中の、最も外部的な、即ち最も自然に接近した、從つて人格化の最も粗大なる部分が、便宜上「生產」と呼ばれてゐるのです。もし消費が資料の人格化を意味するならば、私どもの經濟活動は消費の外にありません。

三〇、生產と消費

生產といふ名前は、人格化の粗大なためにつけられたのでは、もちろんありません。自然物に人工を加へて變形變質した結果は、人間の理想の實現であつて、本來人間とは無關係に存在した、自然そのまゝとは異つたもの、特に人間生活の目的に適合するやうな性質を帶びた一種のもの、即ち値うちを含んだものが出來あがりますから、そこで外形上値うちの具體的に作り出される意味で、特に生產と呼ばれるのです。同じく外形上からすると、私どもはその生產物を、その値うちに從つ

て個人々々の直接生活資料として用ゐてしまふのでありますから、そこに建設ではなくて破壞、生産に對して消費の意味を生じます。又生産は經濟生活上の社會的過程、消費はその個人的過程と區別されるやうな特質も一部には存しますから、社會的見地からも、生産と消費との區別ができるわけです。

しかしとにかく生活の內面的意義からすると、或は平面的でなく、立體的考察からすると、自然物質の人格化の意味に於て、自然物質をそのまゝに置かずに、外形上には人工を加へて破壞してしまふ意味に於て、經濟生活は總て一つゞきの消費であり、又自然の上に理想を實現して、內容上には新たに値うちを作り出し、その終極は私どもの生命の成長發展を結果する意味に於て、總て一とつゞきの生産です。つまり一つことを方法の上から、材料の上から見れば、總て消費、即ち破壞、目的の上から、意義の上から見れば、總て生産即ち建設といふことになります。而て外面から生産と消費と分けて見た場合には、消費が目的、生産は手段といふ關係になることは、申すまでもありません。

經濟産業の發達した今日に於ては、その組織關係は大へん複雜になつて居りますけれども、生活の內面的意義や、道德的文化的原則、また生活的要求の本旨に照らしてみれば、實行上の經濟生活は右のやうに簡單なものです。

要するに、私どもの人格の具體化、即ち生活は、自然物質を離れて成立たないものであるから、自然物質は缺くべからざる要件に相違ないのです。ただそれは自然の人格化、物の上に於ける理想の實現によつて、始めてその意義を生ずるのであるから、つまり物質は奉仕生活のための資料たるに過ぎません。物質を獨占的に所有する意味での「金もうけ」のために産業が行はれるといふやうな餘地は、その間のどこにもないはずです。

事實上「金をもうける」といふことの手續きは、本來人類全體への賜與物たる自然物資を、個人で獨占するか、乃至は他人の生活資料となるべき部分を削減して、自分の資料を增加するかの方針に本づく努力の外にありません。而もこれは結局人類相互に嚙み合ひ、殺し合ふ動物的鬪爭世界の建設を目標とする生活方針であつて、人間社會の原則と正反對の方向を取るのでありますから、文化の精神からは排斥されなくてはなりません。

三一、浪費

私どもの生活に於て、外形から見てのあらゆる消費は、內面から見て必ず生産でなくてはなりま

せん。さもなければ、消費の目的に外れ、又生活の目的に外れるのです。精神的人格的意義に於て個人的と同時に社會的に、生産、創造、成長　發展の結果を來たさない消費があるなら、それは空虛な消費、無建設の破壞、文字の表面意義通りの消費、即ち浪費であつて、自然に對しても、他人に對しても、許すことのできない犯罪です。この浪費に屬する消費は、一厘一毫に値ひする物でも許してはなりません。

浪費とは、物質に關してばかりではない。時間や場處に於て、心身の能力に於て、特に最も考へられなくてはなりません。心身の能力でも、自分のものであるから、自分の勝手に浪費しても差支へがないと思ふなら、それは大きなまちがひです。それは人類に捧げらるべきもの、人類を通して理想に、神に捧げらるべきもの、人格の値うちを發揮するための、最も貴重な要件であるのですから、それを無意義に使用するやうなことは、大きな不德です。

或は又餘分にあるものだつたら、それを棄てようと、どうしようと勝手ではないかと言ふ人があるなら、私は反問しませう。一體餘分とは何のことですかと。綜合的關係的に見た自然物に、餘分といふものがあるでせうか。又捧げるものに、餘分といふことがありませうか。理想實現の過程が無限である以上、その過程を運ぶ資料も無限になくてはならないでせう。自他共に總てがとり用ゐて、人格としての値うちを充實する生活資料に、餘りのできるはずはありません。もし一部分に餘りを生ずるなら、それはどこかに不足なところ、生活過程の進みの止まつてゐるところ、關係を離れた一部分の固定があるに相違ありません。

現在の實狀から見ても、いはゆる財產に餘裕のある人と、ない人とを比較するならば、有り餘るといふ人は、恐らくごく少數であつて、大多數は窮乏に苦む人です。餘るといふその「餘り」は、たしかに社會の一部だけを分割抽象した上の虛僞なのです。虛僞とは必ずしも個人的罪惡を意味するのではない、人類の生活關係のどこかに、虛僞を許す間隙があるのです。私どもはその間隙のどこにあるかを突きとめて、それを矯正充實し、人間としての正當な生活世界を、社會のすみ〳〵まで徹底して打建てなくてはなりません。「各その志を遂げしめる」やうに、總ての人がその理想實現の自由を確實に保有し得るやうに努力するのは、社會的奉仕の最も重大な、緊急な政治的要點です。

以上は、生活の方面から見ての浪費ですが、私どもは更に材料そのものに對する態度の上から、極めて重大な浪費の問題を考へて見なくてはなりません。

人間は自然物を勝手に使用し、殊に人情の忍び得ないやうな慘虐な方法で、他の生物——高等動物までも、殺した上に、皮を剝ぎ、肉を刻み、煮たり、燒いたり、食べたり、着たりしてゐますが

一體人間に何の資格があつて、この慘虐を敢てする權利が許されるのでせうか。

弱者の肉が强者の食となることを常態とする、現實の生物界の生活法を、人格としての人間の生活に持ちこむことはもとよりできません。「人間が文化の生産といふ立派な仕事をしてゐるから」とすると、どんな人間のどれだけが、果して眞の文化のために奉仕してゐるかといふ問ひがでるでせう。文化的生活と言つても、もし自然を除外しての言ひ分なら、まだ人間の勝手です。これは人類對自然の問題ですから、人間社會内だけの理由では、解決をつけることができません。どうしても人間界よりひろい、宇宙的の原則を求めなくてはならなくなります。

それで前々からの考へをこゝにあてはめ、途中の說明を省いて結論を持出しますと、人間、或は自己、或は現實の事ほか考へない人間が、人間の名のゆゑに、又は自己の便宜のために、他の生物自然物を取つて食つたり、着たりする權利は全然持たないはずです。自然物も無意識ながら生の意慾を持ち、宇宙的の目的を持ち、終極に向つて創造的進化の過程に生きつゝあるものです。從つて人間が手を下すなら、その目的に向つてよりよく生かす助力でなくてはなりません。逆にいへば、宇宙の文化意志がよりよく實現するためにでなくてはなりません。

それゆゑ人間の立場に於ける自然物の處理は、人格生活に於て究竟の理想に一向精進する者が、自己を通して、より低い自然物を、値うち化し、精神化し、理想化し、人格化する過程或は方式としてのみ許されます。

自然生物的の人間が、意識しつゝ、個我の嗜慾のまゝ自然物を勝手に處理するのは、絕對の浪費、どんなに節約しても間に合はない浪費です。

この重大な宇宙經濟の道德的意義、又自然に對する深刻な道德的經濟的責任に就いて、私どもは遠く深く思慮するところがなくてはなりません。

三二、二つの頽廢生活と眞の勞働

理想實現の努力はつまり勞働に外ならないのであるが、更に狹くいへば、一つの職業を擇んで、獻身奉仕の努力を社會に具體化するといふ總ての人の義務は、勞働によつてのみ盡されます。現在普通にいふ「勞働」は、その中でも、筋力を主として物質的生產事業に從事し、同時にその生產とは全く別に、勞働そのものが商品として取扱はれるやうな場合のみを指して言つてゐますが、しかし人間の要求を充たすための仕事は、筋力による物質的生產のみでなく、又勞働は金に換算すべき性質のものではなく、人格を具體化して、その內容を充實しゆく努力なのであるから、勞働といふ名

前を現在のやうに狹く、外形的に、部分的に、手段的に用ゐるのは妥當でありません。

世間の人が勞働を賤む習慣を作つたのも、勞働といふことを、人格的意義のない、機械的物質的なものに限つてしまつて、その外に勞働はないやうに考へたからであつて、このやうな勞働はたゞその努力の苦痛の代償として、生活資料が得られる――それも現在に於ては極めて不十分にしか得られない――ほか、何ものもないのであるから、その結果、賤しむ以上に嫌み忌つて、出來れば勞働なしの獲得をしたいと思ひ、結局その實質精神に於て、賭博か、乞食か、盜賊かの、いづれかの道を、又は三者を合せ擇ぶといふ誤りに當然陷つたのです。

更にまた同樣の見地から、生活は「虛僞の勞苦」と、「官能的享樂」とに二分され、貴い生命はたゞこの二つの機械と自然とのために浪費されてしまふといふ、最も排斥すべき叛逆的頽廢生活が現はれて來ます。そこには人格的生命の芽が全く萎縮してしまつてゐます。實に慘ましい人生の破產と言はなければなりません。

人格的自由の精神の全然無視された、機械主義の勞働を嫌忌し、自由が具體的に味識される感じの する享樂を好愛するのは、人性の要求からまことに當然のことであるが、唯その理解がまちがつて居るのです。そんな無意義の勞働の外に勞働といふものがなく、從つて勞働そのものには値うちがないとする理解は誤りです。値うちを感情として味識する享樂は、人性の根本的要求の一發動ですけれども、官能的な、低劣淺小なものゝ外に享樂がないやうに思つて、それに耽溺するところに、人間性の十分な發露と味識とのあるやうに思ふのは誤りです。この機械主義と動物主義とは、人間性の要求と正反對の方向をとるところの墮落的生活であるから、共に極力排斥し、改善しなくてはなりません。

眞の勞働は眞の享樂と共に、人生の內容そのものを充實する要素であるから、これは生きてゐるかぎり、一日も忘れてはならないものです。而て享樂は享樂として、生活の一分化をなすものであるが、同時に又各分化の中に、それ〴〵互ひに內含さるべきものであるから、勞働を主としていへば、勞働の中に享樂の要素が含まれてゐなくてはなりません。更に言へば、勞働がそのまゝ直ちに享樂でなくてはなりません。さもなければ、人生の眞內容となる勞働の旨意が失はれるのです。何となれば勞働とは理想の實現、自然の人格化、生活の價値化を具體的にする過程であり、而してそれは自由の發揮乃至獲得であつて、その自由――生命の自由、更に生命そのものゝ味識が享樂であるからです。

三三、職業と家事

かくの如き勞働を内容として、理想を具體的に社會に實現する、即ち自己を貢献する職業（廣義）は、なに人にも離るべからざるものであることが明かです。職業によつて社會に勞働して　自然の人格化、價値化、即ち生産に力めない人は、恥づべき賤人であることが明かです。從つて又なに人も眞正の意味の職業を持たないことのないやうにすると同時に、眞正の意味の職業乃至勞働が自由に十分に出來るやうに、境遇の整理と、社會の組織とに力めることは、私どもの政治的要件でなくてはなりません。

かういふと、家庭の雜務に沒頭しなければならないやうな、現在の多數の女性にあてはまらない見方ではないかといふ問ひが、或は出るでせう。いかにもあてはまらないのは、たゞ女性ばかりでありません。現在の社會的境遇に於ては、男性にでも、しつくりとはあてはまりません。それは人間としての自覺を持つた男性が、どれだけその生活の目的と手段との矛盾に苦しんでゐるかを見てもわかるでせう。社會的「改造」の要求、乃至運動の起るわけの一つがそこにあります。

けれども前述でわかるとほり、私どもの必ず就くべき職業は、現實の社會的外形で機械的に定められたものではなくて、理想の内面的意義によつて、必然に定められるもの、つまりいふところの天職なのでありますから、その人の考へ方、或は仕事の態度動機目的如何によつて、外形がどうであらうと、或る程度まで、なに人のいかなる仕事をも、天職とすることができるのです。

從來家庭と社會との間に著い差別をつけてゐた考へ方を改めて、家庭にもつと社會的要素を加へる必要があることを、前にも申しましたが、同樣の立場から、家庭内に於ける各個人の役目の考へ方に、從來よりも一層社會的の意味を加へる必要があります。衣、食、住、總て家庭内で終始完結するといふ生活要素は、殆どないのでありますから、それらに關する勞働は意味に於て社會に對する貢献であるのみならず、外形からしても社會的事業に進出する道は、いくらも開けて居ります。

たとへば分娩育兒にしましても、最も重大な自然の人格化、即ち生産でせう。その上子どもは自己の發展、或は第二の自己の生産であると同時に、自分のものであるから、自分の滿足できる限り、どんな育てやうをしてもいゝといふ考へ方は、全く社會的の考へ方でありません。たとひ子供は親の子、親の分身であつても、一個獨立の人格として、親の所有物であり得ないものでありますし、親と等しく、無限の生命にその生誕の源を持つて居り、絶對の理想の直接の顯現たる意味に於ても、決して親の私情私心の相手とすべきでありません。又人類全體はその人格的進展の後繼として、あらゆる子どもに要求を持つわけですし、國家社會はその人格内容、即ち組成員として、一人々々の子どもに要求を持つて居ります。從つて親は天地、人類、社會から子どもを委托されて、養育の任

務を負うたものと見なす外はありません。この意味に於て、育兒の仕事は、社會に對して重大な責任を持つた、高貴な、嚴肅な奉仕的の職業です。かういふ見方は、自然主義者からすると、情味のないものに思はれるかもしれません。しかし人間としての自覺と要求とに生きようとする人は、親を莊嚴する光が、このやうな高大な道德的背景を持つた人情の中から輝いて來ることを承認するでせう。その外の家事萬端も、推して考へることができるらうと思はれます。

三四、社會人の資格と責務

職業と勞働とを、金を取る手段といふ、商業主義的見地の外に置て考へると、どうしても外形からその意義を說明することが困難になり、なに人も社會人たる限り、必ず常に携はるべきものといふ根據を與へることができなくなります。そこで努力の目的乃至動機が「社會に對する義務、責任貢獻、奉仕にある一定の仕事」といふ、內面的、道德的見地を取らなければならなくなるのです。

この見地からすると、なに人も、どんな形式かで、常に職業を持ち、勞働することができるわけであつて、こゝに社會人としての資格を持つことになるでせう。前にも言つたやうに、生命ある社會は、勞働を內容とする各社會員の職業を組織して各種機關を造り、それを統一して、全社會員の目的たる、一つの大きな値うちを實現創造してゆくところの、活動體でなければならないのでありますから、いかなる人の活動努力をも散逸浪費させないやうに、それを職業化させて、社會の人格的成育を結果させなくてはなりません。而てそのためには、從來の商賣的職業觀を全く改めてかゝらなくてはならなくなります。

商賣的職業觀を改めるとは、いふまでもなく職業と勞働とを、全く金儲けのための手段とばかり考へる、或は職業と勞働との目的を金に置くといふ考へ方を改める意味であつて、經濟といふことゝ全く無關係にする意味ではありません。職業は私どもの生活に必要な、あらゆる要素の生產乃至消費に關係する外にないのでありますから、職業が經濟と無關係になるわけはないのです。

更にまた職業は社會の現實を離れてはなりたちませんから、改善的態度をとりつゝ、同時に現實の社會の要求に適合するやう、種類や形式が定められなくてはなりませんが、しかし私どもの生活努力の最後の目標は、社會の現實的外形にあるのでなくして、その理想的內容、即ち絕對の人類的理想、即ち至善の値うちにあるのであり、現實の社會的要求も、その根柢は同樣であるべきはずですから、結局私どもの職業の肝心とするところは、至善の實現といふことに歸着しなくてはなりま

せん。社會的方式によつての、至善の實現に對する全的永久的の努力こそ、人類の要求する値うちの創造的內容となるものであつて、それが、社會の要求する、又個人の滿足する最後のものであるはずです。

人格としての人間の立脚する大地は、外形的現實の社會の表面ではなくして、深い內面的意義の世界であるのですから、從つて私どもの社會は、この內面的意義の表現、即ち理想、或は値うちの具體化された組織及び活動でなければなりません。即ち自然社會でなくて、文化社會でなくてはなりません。

この文化社會の建設、これが社會人としての私どもの總括的責務なのです。

三五、勞働と修養、職業の貴賤

職業を、前述のやうに、高貴な責務と解釋するときに於て、之がための勞働は、同時に最も具體的な向上精進、即ち品性の修養とならなくてはなりません。人格を社會的に實現する方式としての職業に勵精する限り、それほど有力な社會的の修養法はないはずです。修養と仕事とが別々な努力となるのは、既に重大な人格活動の分裂であつて、「二兎を追ふものは一兎を得ず」といふ格言が、最も著しい證績を示すべき場合です。私どもの人格の要件が統一といふことに存するならば、修養は同時に生產的の仕事となり、仕事は同時に、精神修養の具體的努力となる。むしろ修養は直ちに內面的意義に於ての仕事であり、仕事は直に具體的努力としての修養でなくてはなりません。仕事と修養とが、一體の兩側面であるといふ實質を持たない職業は、僞りであると見るべきです。その仕事は、機械であり、その修養は抽象であると見るべきです。

しかし人格的自覺に基いて擇ばれるかぎり、職業に僞りといふことはないはずですから、僞りがあれば、職業に力める態度に僞りがある、その人の精神に僞りがある、即ちその人に僞りがあることになるでせう。このやうな僞りの人は、必要にして、且つ正當な職業に、形の上から强いて貴賤の階級をつけたがります。而て貴いと誤判した仕事をしてゐるもの、仕事をするといふよりも、むしろその地位に就いたといふ名前だけで威張ります。賤しいと誤判した仕事に就いてゐるといふ名前だけでしほれます。

習俗的な自然主義の世間で、低い職業と評價する仕事をしてゐるものが、その無智な世間の誤謬に雷同附和して、自分自身を嘲笑するやうなことは、仕事を解せず、自覺を持たず、生活に勵精しない、その人の無智と懶惰との廣告です。

もし職業に貴賤があるとすれば、客觀的には必要にして正當な職業が貴いのであり、不必要にして不正當な職業が賤しいのです。主觀的には職業を功利的手段と見做し、且つ低級なものと見做す態度が、その職業を賤しいものにするのであり、それに反する場合には同じ職業をも貴いものにするのです。私は反問いたします。世間がもし必要にして正當な職業をも輕蔑するならば、何ゆゑその職業の効果を徹底させることに依つて、その職業を通して、高貴な人格を實現することによつて世間の暗愚を警醒し、その職業の位置を高めないのですか。自分を社會的に生かしてくれる、恩義ある職業のために、何ゆえ寃を雪ぐ骨折りをしないのですか。

職業を人格生活の目的から分離して、單純な功利的手段とし、而も卑賤にして且つ苦痛なものとする誤謬不合理を矯正し、職業團としての社會を、同時に修養團として、更に享樂(生の美的鑑賞)團として、綜合一體の人格的活動團たらしめる努力は、社會のためにも、個人のためにも根本的急務です。而てその端緒は、職業的勞働の內面に人格實現の意義を充實させるといふ、一系統の努力に存します。

三六、社交、社會的儀禮

職業は社會の動的組織要素として、全體及び相互の必要關係の上に成立つた、意力的の要件、言はゞ社會の筋骨をなすものですが、その血肉となつて、情味の方面から、社會の融合調和を結果するものに「社交」があります。社交は必要關係の上に立つものでなくて、自由關係、好意關係の上に立つもの、社會感情の滿足によつて、社會生活そのものゝ內容を味識體驗させ、社會の統一生長を、個人的隨意的の享樂の中に成就する作用でありますから、この意味に於て、むしろ積極的な社會生活の要件とも言へるでせう。

こゝで社交といふのは、國家的の儀禮、個人間の交際、その他、共感同情に基いた、社會的行動交渉の、一切を含むのですが、定められた公共的の儀禮と、隨意的な個人間の交際との間には、內容的情味に於て、多大の相違があります。

國祭日、國際記念日、その他の公共的弔賀に關する儀禮は、規律的形式的な中に全民衆が、同一の目的に對し、同一の感情を共に湧かすために一種の大きな悅びがあり、その關係する社會全體の共通意識を强める上に、大きな効果があります。その代り、內容の空虛冷淡なものになり易く、單に旗を揭げる日と考へたり、遊樂の日と考へたりするやうになりますと、全然その意味を失ふことになりますから、全社會員に對して意義の薄弱な、たゞ習慣的形式だけ殘つてゐるやうな儀禮をば

廢して、民衆的に意義のある儀禮に就いては、十分にその目的の徹底するやう、取行はなくてはなりません。總て意義が切實でなく、感情の冷淡な儀式の形だけを強いることは、儀禮の本旨からも民衆その人の生活からも、亦その社會の希望からも、却つて有害な結果を生じます。

家庭にも弔賀に關する習慣的儀禮があります。その態度用意に於ても、社會公共のそれと同じことですが、これはまた單なる習慣や、世間體や、虚榮や、更に又不純な功利心などから、無意義な浪費をする弊害も少くないやうです。殊に結婚と葬儀とにはそれが多く、自然感情が外面的に誇張されて、少しも合理化されず、本來の精神を汚してゐることを見ますが、總ての進歩は內面化、精神化の方向をとるのですから、家庭內の儀禮でも、その方向をとつて、だん〳〵改善されるべきです。

科學的知識と功利的見解とから、儀禮の一切を無智の迷信か、または空虛な形式かに過ぎないと排斥する人があります。或は又生活を改造して、新い意義を充實しようとする理想家は、舊い習慣が現在に適しない理由から、一切の儀禮をやめることもあります。固定した迷信の弊もたしかに多いのですけれども、それ等の根柢には、やがて人格の永遠性、生命の實在にまで醇化される要素があつて、機械的斷片の偶然的現實に滿足せず、時間的、空間的に永遠普遍の一全體を生活に實現しようとする要求の働きが見られるのですから、それは遂に絕對の値うちの創造となり、最も深刻な生活の力となつて、再び現實に還つて來る可能性があります。從つて迷信と言つても、强いてその根柢から打ちこわすべきでなく、改造醇化を試るべきです。

形式、習俗にも、不合理なものが多く、それに功利や虚榮も手傳つて、浪費を强いてゐますが、やはりそこに社會性の要求はあるのですから、これも合理的なものに改造する可能性はあるでせう理想的意義を生活に充實させるために、舊い習慣の桎梏を破壞しようとするのは、貴重な青年思想の發動であつて、この一本調子な若い衝動を缺けば、社會は死んでしまひます。たゞ舊い習慣の意味を考へ、その由て來るところを尋ねて根原に遡り、人格の要求に基いた一般的の原理を發見してその實現としての改造を行ふのでなくては、單なる破壞に終つて、人生的の値うちを作り出すことができません。

三七、個人的の交際と贈物

個人間の自由な交際には、もとより一定の規矩といふものがないわけであるが、たゞ人と人との關係生活を整頓して、各人の自由を發揮させ、眞性を發露させるための作法は、原則としていかな

る場合にも存すべきはずです。

關係には親疎遠近、いろ〳〵ありますから、作法のあらはれる形もいろ〳〵になるでせう。一般の習慣として固定した形式によらなくてはならない場合もあるし、殆ど態度精神だけで、表面の形式を要しない場合もあるでせう。たゞ作法と、それを裏づける精神とは、いかなる場合にも缺くべからざるものであることを忘れてはなりません。作法が形にあらはれた場合は、その裏面に十分な心持が充實してゐるべきであり、心情だけが表面に流露してゐるやうな場合には、作法の原則は、裏面に十分守られなくてはなりません。

表面に嚴格な、又はていねいな作法の守られる場合には、裏面の心情が缺乏して居り、表面に心情の流露する自由の十分な交際の場合には、作法の心得が忘れられてしまふといふやうな、或は深みのない、或は不たしかな生活は、いづれも人格の眞實性を失つたもので社會生活を害します。

この頃、個人的、或は家庭的交際上問題となるのは、贈物と飲食とが無意義に用ゐられ過ぎるといふことです。

適度に達しないのも、また超えるのも、すべてよろしくありません。贈物はつまり捧げ物である筈ですから、人を通して神への心持ちで、最も敬虔な用意を持つべきです。奉献する物の最大なものは、自分に於て最も貴い物、即ち自我、生命、精神、魂の外にないのですから、完全に奉仕の生活をする場合には、特に世間でいふ贈物をする餘地がないでせう。しかし現在は社會に不完全を脱し得ないから、贈物の形で奉仕されることもまたある筈です。この場合に、捧げる物は紙一枚の瑣細なものでも、それはたゞ表面のしるしであつて、それに代表される內容は、常に全我の精神でなくてはなりません。然らざる限りは、たとひ億萬の財寶を積むとも、それは僞りの贈物です。

人格を棄てたものは、返報を豫期し、利益の打算をして、精神の空虛なものは、てれかくしのために、虛飾のために、判斷力を缺くものは、人の慾情に媚び、自分の優越感を滿足させるために、贈物をします。これ等は皆僞りの贈物の類です。贈つても贈られても、心あるものが不愉快を感ずるやうな贈物、心の束縛を感ずるやうな贈物をしてもなりませんし、受けてもなりません。

形は何であれ、そこに心からの悅びがわき、心からの感謝がこもり、双方の眞情と眞情とがそれによつて發露、綜合、具體化され、一つに燃えあがる生命の發動を體驗されるやうな贈物、それによつて心の自由が享樂されるやうな贈物は、多くあるほどよろしいのです。しかしまた表面に現れた物品などはなくても、氣にしてはなりません。物あるによつて心は徹底しますが、物に拘泥すると、心は却つて消えてしまひます。

三八、交際のための食事

飲食は人生にとつて、最も貴重な要件です。たゞに實用的に見て缺くべからざるものであるがためでない、飲食そのことが、直ちに生活の發動そのものゝ享樂です。殊に多くの人がそれを共にすることは、官能の活動充足を通して、共感同情の喜びに徹底するのであるから、人間交際の最も具體的な機關といふべきでせう。それだけまた科學と道德との考へをいれて、最も嚴肅に、敬虔にとり扱ひ、決してかりそめにしてはなりません。

官能の滿足に止まるのは下等な生活ですから、適度以上に御馳走をならべて、必要以上に暴飲暴食するのを物質的として賤しめるのは當然なことですが、しかしそれがために食事そのことを蔑視し、食物などを見向きもしないのを精神的態度として尊ぶのも、實は形に囚はれたもので、精神的ではないのです。精神的か否かは食事そのものにあるものでなくて、食事をする態度にあるのです。

クリストが最後の晩餐のときに、葡萄酒をつぎ、パンをさいて「これはわが血である」「これはわが肉である」と言つて、弟子たちにわけたといふことがありますが、これは決して比喩的の修辭でないと私は信じて居ります。食物はどこから來て、どんな効果を私どもに與へて居るでせうか。

食物が私どものロ中に運ばれるまでには、幾多の人の血と汗と加はつて居ります。而も食物となる資料の生命は人間が自由に作り出し得るものではなくて、遠く宇宙の生命に淵源して居るとほか考へられません。即ち食物には、その淵源から、その培養加工から、貴い値うちが盛りこまれてゐます。食物が私どもの養ひとなるのは、つまりこの値うちが私どもの肉體を通して實現されるのですから、食事は人の血肉を食ふもの、宇宙の生命を食ふもの、さうして更に之を値うちとしての人格的生命に化するものと言つて差支へがないでせう。

食物が負荷してゐる値うちを、私どもの肉體を通して實現させるには、それに適當な食べ方をしなくてはなりません。人格生活の本旨に從へば、食物の培養、採取、加工は、すべて神聖な捧げものとしてなされるはずですから、とりも直さず神前の供物です。從つて食物を「たべる」とうつかり言つたのでは、私どもの食事の氣分が表はされません。「いたゞく」といふ言葉を、文字通りに使つて、むしろやゝ近い表現となります。

この食事を人と共に味ふほどの貴い快樂があるでせうか。一しよに一杯の茶を啜り、一椀の飯を食するとき、人と人とが心から融け合ふのは、決して理由なしでありません。この場合に、一とつまみの鹽も非常なご馳走となり、一口の水も葡萄の美酒に勝ることのある經驗から推して、クリス

トが婚禮の宴で、水を祈つて酒に變へ、五つのパンを五千人に分けて餘つたといふ記事は、形からいへば誇張した比喩でせうが、意味に於て正に事實であらうと信ぜられます。

三九、食事の用意

食事が既にこのやうなものであれば、決して無意義にすべきでありません。強いるべきでもなければ、吝むべきでもありません。一粒一滴もゆるがせにしないのは、世にいふ功利的節約のためのやうな、輕々しいことでない。食物の性質上、私どもの心持ちの上から、自然にさうでなくてはならないのです。普通の科學以上の、更に高くして精しい科學的判斷を以て、最も適當な取扱ひをすることによつて、始めてこの性質、この心持ちが實効としてあらはれます。

前にのべたやうに、最も手近かな、簡易な物の中に、最も痛切な、深刻な實用と享樂、或は道德と藝術とを具體的に綜合したものとして、食事以上のものはないと言つていゝのであるが、交際の手段としての食事は、殊に普通の意味の「必要」といふこと以外の、享樂的、藝術的要素が主となるために、遊戯的、又は利用的の惡手段に陷り易く、從つて又だらしなく、不規律になり易いのです。それだけ道德的良心の鋭利と、一層科學的判斷の精確とを要します。「そんなことでは興がさめる」といふ人があるなら、それは淺はかな人と言はなくてはなりません。興をさますのでなく、眞に興に醉ふために必要なのです。

たゞ珍らしい材料を擇び、たゞ美味にのみ調理し、たゞ分量を多く並べるのは、動物園の御馳走であつて、人間社會の御馳走ではありません。人間の食物は物質の中に含まれた心持ちです。食物を通して、御馳走の心持ちをたべるのです。人格として生きる、即ち意味の世界、精神の世界、値うちの世界に生きる人間は、文化的の食事、即ち意味の食事、精神の食事、値うちの食事に於て、始めて喜びます。

ちかごろ調理にも、美味の工夫ばかりでなく、材料、配合、方法、分量の上に、營養に關する科學的考慮が加へられるやうになつたのは、喜ぶべきことですが、しかしそれだけでは、まだ自然主義の境界を脱し得ないものです。食卓の飾りや、話題などに、藝術趣味を加へるのを文化的といふ人などもありますが、それも文化の本旨ではありません。もつと大切なのは人間味です。高い精神へのあくがれから出た、人を悦ばせ樂しませようといふ眞情です。それが充ちてさへ居れば、材料は番茶一杯でも結構なのです。

さうかと言つて、動機さへよければ、あとはどうでもいゝといふのではありません。善なる動機

が、必ずしも善なる結果を生むとは限りませんから、食事をその場合に適當させて、美しい眞情を貴い享樂の現實にまで結果させるために、深切な科學的判斷の働きを、たえず實行の過程に加へる必要があります。交際、即ち人格と人格との融合のための食事には、方法資料を媒介として、一つの意義精神の世界を開く目的と方法との深切が、常になくてはなりません。

四〇、社交談話とむだ話

社交上の談話は功利的、實利的でない意味での「むだ話」であることを本旨とします。しかし社交の目的に對しての「むだ話」ではいけません。

社交の目的から見ての「むだ話」とは、狹義の「實益」のないことを意味するのでなく、社交の精神を發揮しない、社交の効果をあげ得ない談話といふことを意味します。それによつて明るく、暖かく、柔らかく、潤つた空氣情調を作り出して、その韻律的な流動、交響的な諧調の中に、人と人とを融和させ、內面的統一を、社會感情の自由な享樂によつて成就するやうな要素の乏しいこと少くも何等かの値うちを持つてゐて、共通的意識、共通的情操に訴へない、たゞ無益に鼓膜を打つだけの談話を意味します。

澤山の品物をならべたゞけでは、眞の御馳走にならないと同樣、口數が多いからとて、社交の効果をば奏しません。人間が「話す」といふことは、「善く話す」ことであるはずです。「人間の心情を養ひ、淨め、高めるやうに話す」ことであるはずです。この精神からでない談話は、砂利をバラまくと同じことで、自然現象の噪音に過ぎませんから、人の胸に何の響きも與へません。そんな談話の多いより、沈默の方がましです。

教養の乏しい人の談話には、「むだ話」といふより、「むしろうちこわし」の分量が多いやうに聽かれます。無意味な、箇々散漫な羅列でも、事實を傳へるならまだ許せますが、自我意識が口に出ないまでも、たえず氣持ちに含まれ、從つて「我れ」に對立する彼れがある。而もその「彼れ」は、是非とも味方か敵かでなければ承知できない。そこで態度は切迫し、感情は昂奮し、材料は個々他人の偶然な言動で、內容は主觀的な、感情本位の似而非批評、それを成立たせるに都合のいゝ材料だけが拾ひ集められ、あとは誇張や想像で辻つまが合はされます。

客觀的態度がなければ、關係生活の上に成立つところの「世界」といふものがなく、空虛な、根のない、自我の影の獨角力に過ぎませんから、深みも味ひもありません。少しゆとりができるかと思ふと、馱じやれか、わるふざけになつて、樂屋落ち、獨りよがり、自分だけおもしろくても、聽

く方では、知識としてあまり無意義、感情として總て不愉快、要するに醜惡になります。

汚物の吐きくらべ見たやうな、この主我的傾向のおしやべりがいくらより集まつても、もと〳〵共通の客觀世界に立脚しない、小主觀の陳列にすぎないから、社交の成立つ氣づかひはありません談話がはづむほど、たゞ騷擾を感ずるばかりです。この破壞的要素のはびこるかぎり、その程度に於て僞社交になるのが當然です。

四一、社交の根本的な用意

社會生活一般の必要から言つても、また私どもの要求からしても、社交の用意態度は、できるだけ人間生活の本旨に一致することを原則としなくてはなりません。私どもの微力と短い生涯を以てしては、なるべく力の分散をさけて、本質的な生活に集注すべきで、この一事は老若男女貧富の別に關係なく、誰しもつとめなくてはならないことですから、社交もこの要件の下に考へられるべきです。さうしてそれは最も純眞な心に發し、人格の本を暖め育て合ふといふ一事に歸着するでせう感情の方面でいへば、至善なるものへの思慕憧憬、即ち愛の根源に於て一つになることです。

至善なるものへの思慕憧憬から來るところの愛に裏づけられた融合、人間生活の本質を目がける集注努力は、自然に人の態度を引しめて、まじめに、清らかに、奥行きふかくせずに置きません。散漫、浮薄、空虛、汚濁の餘裕を與へません。意味ある眞の社交はそこから生れて來るでせう。

それではあまり窮屈すぎる。折角自由な情味を樂しまうとする社交の目的に反することになるといふ人が、あるかも知れません。しかし人間關係の本質が充足されてこそ、ほんとうの喜びが味はれるのですから、社交の値ちをその外に求めることはできないはずです。

一體ほんとうの窮屈はどこから來るかといふと、その根本は自我、或は小主觀の牢獄に囚はれることの外にありません。この牢獄から脫け出して、眞の自由人になりさへすれば、人と人とを隔てる牆壁は忽ち消え失せて、あらゆる人の心をのび〳〵と住まはせる自由の廣天地が、自ら開けて來ます。この廣天地の樂みを一つに味ふことが社會感情の滿足であるから、それ以上の社交の目的はないはずでせう。

社交の用意としての卑近な、目前の手掛りは、自分だけが先づ興がらうとする態度をやめて、總ての人と平等に一樣に喜ばうと心がけることでせう。その心がけで居れば、自我意識、他人批評のいやみもなくなり、多勢の中での一人か二人だけのコソ〳〵話も止んで、同じ明るい空氣の中に、全體一緒にひたることができるでせう。特定の相手を目的とする場合でいへば、敵と見做したいや

うな相手に對して、自分の感情を抑へ、自分の解釋や批評をさし控へて、相手の眞實を理解することに力めることです。

かうして自我の執着を離れた態度をそのまゝに、ふりかへつて自分を眺めたとき、始めて公平に自分の正體が見え、公平な自分から、相手も公平に見られ、從つて自他の關係が明瞭に見えて來ます。關係が見えたといふことは、平等の自他を以て組織された統一「世界」が現はれたことで、その世界を背景とする自我は、もはや空虛な影でなく、客觀を以て充實された自我であり、相手も亦自分と離れた彼れでなく、自分と一つ世界を共有する彼れ――客觀化された主觀でありますから、そこに愛に充ちた調和の道がひらかれ、その間の交渉の表現である談話には、おのづから深みと味ひと、即ち意義內容を持つことになるのですが、平等な自他關係の上に統一世界の組織されるといふことは、社交だけのことでない、社會成立の基礎的要件です。社交がこの要件の上に立つて行はれる時、はじめてその意義が充實されるわけです。

換言すれば、社交の基礎的要件は、總ての人が、愛に於て心から融け合ふ活動の、諧調と韻律との流れに浸つてゐる、その自由の和樂にあるのですから、めい〳〵の胸に深く沁み入りながら、同時に全體をふつくり包むやうな、共通の味ひある氣分空氣を作り出すやうに、お互ひに力めないかぎり、社會生活の要素としての社交は決して成立ちません。

四二、社交の基調と善の理想

愛の働きは客觀的態度の一面がないと出て來ません。その態度を導き易くするには、いろ〳〵な自然と藝術との鑑賞を中心とする集まりなどが手近かな方法でせう。

併し社交の基礎は生活を共にするといふことにある以上、その趣旨を最も具體的に現はす方法としては、一つの貴い共通目的の下に、一しよに働くことが擧げられるでせう。そのために擇ばれる仕事の種類や方法に限りはないでせうが、たゞ肝要なことは、淸い共同奉仕の精神に立脚することと、心の態度としての靜和沈默とがなければならないことゝです。奉仕など〳〵いふと、むづかしいやうにひゞきますが、生活の本旨を解する人、殊に宗敎の信仰を持つ人にはあたりまへのことでせう。又沈默といふと社交にならないやうに思はれるかも知れませんが、これは形よりも心の態度です。空虛な聲をあげて笑ひさわぐのは決して眞に樂しいものでありません。樂しいとは、拘束なく、停滯なく伸びゆく生命の自由の味識でありますから、心と心との諧和律動には、出たらめの會話などが却つて邪魔になります。一とたび沈默の深海にくゞり入つて、そこから自然に組み立てられて來

ない談話には、談話の生命がありません。殊に仕事をするといふ具體的な活動によつて、互ひに刺戟し合ふ微妙な交響がある以上、言語の交渉はあまり必要でないでせう。

凡そ人の融合が、最も深い世界に於て始めて行はれるものとすれば、そこには最も根本的な精神と、最も具體的な形式とがなくてはなりません。さうして清らかな思慕憧憬に暖められながら、至善なる一つのものに捧げる共同勞働ほど、その要領を得たことが外にあるでせうか。この靜和沈默の中に於ける共同奉仕の勞働の要領が純一に徹底するなら、それは基本的な社交であると同時に、最も具體的な修養會であり、最も貴い勞働であると同時に、最も深い享樂であり、さうして强い眞社會の幹はこの根から伸び育ち、美しい文化の花はこの幹からさき盛かるでせう。

以上を簡單な言葉に約めますと、社交の基調は人と人とが「心と心とを具體的に暖め合ふ」といふことにあります。本心と本心とに於て、さうして實際的の勞働によつて、人と人とが互に暖め合ふのは、即ち互に人格を養育し合ふのであつて、これがやがて社會生活の基調です。

かくて心の深底に於ける善の理想の追求は、外に發動して献身的相互奉仕となり、更に全體の人格的共同成長となり、こゝに始めて理想の世界が創造され、天國の來現を此の世に見ることになり「善」の生活の目的が遂げられるわけです。

昭和四年四月二十五日印刷
昭和四年五月　日發行

改訂 眞と善との生活
定價 金壹圓

著者　渡邊英一
發行兼印刷者　前田信
東京小石川高田豐川町四三

著者檢印

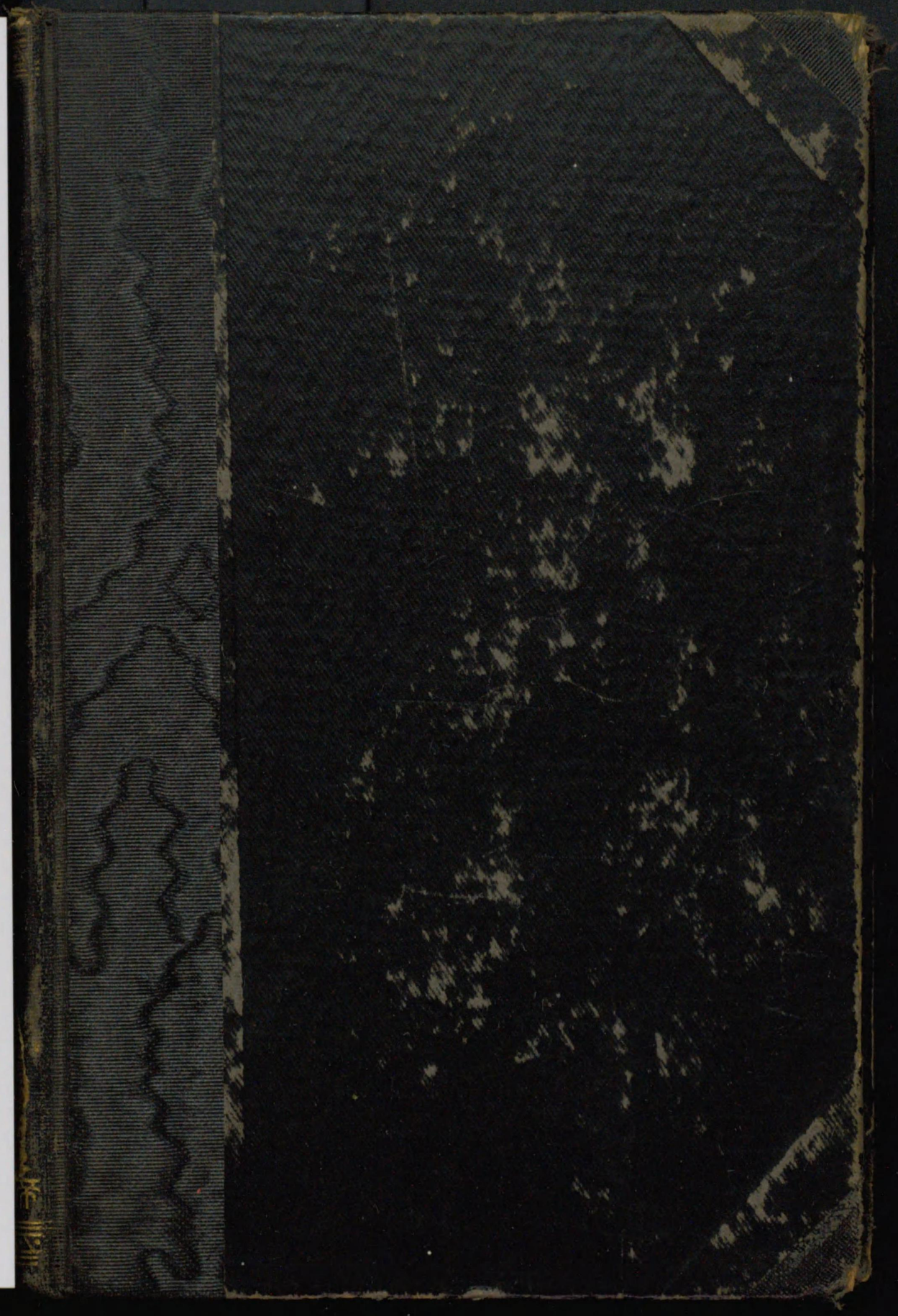
發行所　東京・小石川・目白臺
振替東京六七一四六
武藏野書院

武藏野書院印刷部印刷

◆武藏野書院刊行書

東京小石川區目白臺
振替東京六七一四六

◆實踐哲學概論　松永材著　價貳圓參拾錢
◆奈良美術史料推古編　會律八一編　價貳圓參拾錢
◆比較神話學　高木敏雄著　價貳圓八拾錢
◆日本傳說集　高木敏雄著　價貳圓五拾錢
◆近代國文學の研究　前島春三著　價貳圓五拾錢
◆近松研究の序篇　前島春三著　價貳圓參拾錢
◆日本風俗史要　坂本健一著　價貳圓八拾錢
◆日本文學者年表　赤堀又次郎著　價參圓
◆社寺史論　社寺の經營　赤堀又次郎著　價貳圓五拾錢
◆武藏野とその文學　野村八良著　價壹圓七拾錢
◆原始母神論　出口米吉著　價參圓五拾錢
◆芭蕉襍記　室生犀星著　價貳圓五拾錢
◆魚眠洞隨筆　室生犀星著　價貳圓參拾錢
◆魚眠洞發句集　室生犀星著　價貳圓
◆美と信との生活　渡邊英一著　價貳圓參拾錢
◆偉大なる青年　橋本左內　滋賀貞著　價五拾錢
◆ふたば集六集　岡本綺堂編　價壹圓貳拾錢
◆佐藤春夫著　車塵集　近刊
◆長與善郎著　一人旅する者　近刊
◆廣瀨敏編　日本叢書索引　近刊

5
16

536
160.